

第一章 行政

1 常備隊

明治2年6月、各藩に知藩事、郷内に常備隊を設置、即ち小隊長、半隊長、分隊長を三官と称し、小頭の司官を置き、常備隊を監督操練に当らせた。平時は地頭のもとで、諸般の行政事務を管掌させた。他に調役を置いて、兵器、弾薬、糧食、一般会計事務に当った。

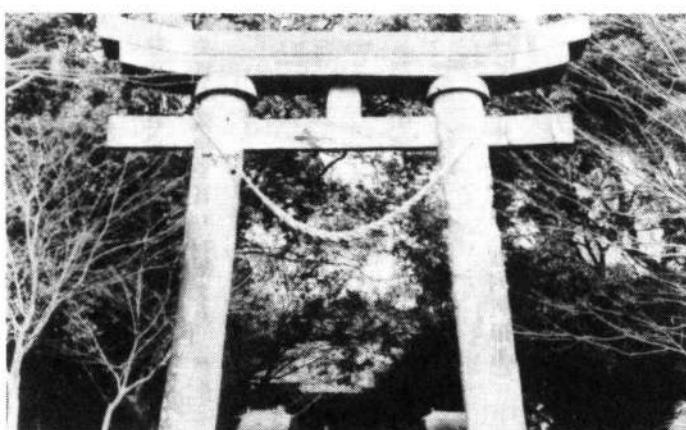
日当山村は小村のため、東襲山村と合併し、地頭、石神万兵士、上原孫左工門、隊長、細山田源右工門（東襲山）、半隊長古河八郎左工門（西光寺）、分隊長最勝寺市郎（東郷）、小頭、園田彦左工門、矢神静一、島田栄助、調役、児玉吉蔵である。月六回宛松永村吉祥院に集合して調練した。

2 戸長制度

明治4年7月、廢藩置県により地頭政治が廃止され、戸長制度が実施された。地頭館をもつて事務所となし、戸長及び戸長助は郡官員の下位に属し、郷政を管掌した。郡官員は郡長、副長、里正、副正、戸長、戸長助とし、郡長50石、副長30石、里正15石、副正9石、戸長助4石を禄として給与した。

3 区制

明治9年、区制を実施し、各郷村町を大小区に分ち、大体一郷を以て一大地区とし、一村を以て一小区又は二小区に分割した。各地に正副区長、役所を事務所と呼んだ。日当山村は第63大区（都城區）で、三小区であつた。



稻荷神社（富隈城内龍波見）

区制は永続せず、明治12年2月より郡治制となる。区長事務所を廃して、姶良郡を所管する加治木郡役所が設置された。戸長事務所も戸長役場と改称、村毎に戸長一名を置き、副戸長を廃して、用係筆生を置き、惣代人在役他種々の職制を廃し、村民の協議を以て組合を定め、組合世話人を設け、村会議員の選挙を行い、町村委会を開設、学務委員、衛生委員も設置され、戸長は一時民選となつたが、まもなく官選に復帰した。

5 戸長、小隊長

小隊長、細山田源右エ門（東襲山）、戸長、井上斧右エ門（七か年）児玉喜蔵、園田彦左エ門（明治15年頃）、最勝寺半次郎（官選）、野村綱紀（国分の人）（明治19年頃）。

副戸長、浜崎清之介（朝日担当）、浜田平左エ門（東郷担当）、有川与兵エ（西光寺担当）、井上斧右エ門（嘉例川担当）。

6 町村制施行

明治21年4月17日、市町村制実施により、地方自治体の成立を見た。日当山村役場は旧日当山小（鳥越）と道路を挟んであり、敷地二四一坪、二階建二十八坪半の役所で、明治21年5月新築した。村行政機構は村長、助役、収入役各一名、村長・助役は名誉職で他に書記若干が庶務を分掌した。村内を四大区に分ち、さらに小組合を設け、小組合長一名を置いた。現在小浜地区ではこの制度を継続している。西国分村役場は真孝錦織寺別院付近であった。

7 歴代町・村町

名譽職村長、最勝寺半次郎(1)、矢神静一(2)、竹下武彦(3)(4)(5)、松本操(6)(7)、古川謙十郎(8)(9)、山下兼雄(10)(11)、児玉喜春(12)(13)、松元清彦(14)、西田金左エ門(15)、松元清彦(16)、山口慶二(17)(18)、荒瀬泰哉(19)、日当山町となり、隼人町と合併、()は代。西国分村長、森山政徳(1)、川上親喜(2)、森山政徳(3)(4)、温田藤太郎(5)、三島亨(6)、川畠熊太郎(7)、三島亨(8)(9)、松重董(10)、原口

栄樹(11)、蘭田新太郎(12)(13)、平山喜一(14)、原口栄樹(15)、川畑熊太郎(16)、蘭田新太郎(17)(18)、福重半之助(19)、末永武藏(20)、野辺辰雄(21)。

8 村・町会議員（西国分村・隼人日当山町・隼人町）

第1回、明治22年4月22日選挙（西国分村）

一級、馬場有右工門、堺長太郎、谷口幸盛、鎌田新二、北上三次郎、山田俊治、川野万之丞、三島源太郎、平隈嘉右工門、二級、藤山孫左工門、松元八十八、野村伊助、野村綱藏、森治兵工、川上新喜、川畑龍助、猿渡太郎太、山内仲兵工、

第2回、明治25年4月24日改選（半数改選）

一級、福永仲助、宮下新兵工、山元喜兵工、米重喜八、上小牧納右工門、西原権助（補助）

二級、鳥丸智寛、田中篤則、川上親喜、前田暎市、山下太次郎、前平利左工門（補助）

第3回、明治28年4月20日（半数改選）

一級、正泉寺休五郎、蘭田新助、山口仁兵工、中村弥兵工、

二級、本村龍右工門、森豊喜右工門、吉野徳右工門、川上親喜、本重金助、川畑龍助（補助員）

第4回、明治31年4月20日（半数改選）

一級、三宅正一、田辺半右工門、徳永休太郎、中村善兵工、塙屋休之丞（補員）

二級、森山政徳、川畑龍助、堺長太郎、仮屋猪之助、宮下新兵工、

第5回、明治34年4月20日（半数改選）

一級、温田藤太郎、松重権左工門、本重金助、原田四郎右工門、

二級、吉野徳右工門、安木喜太郎、堂園助左工門、川上親喜、

第6回、明治37年4月20日（半数改選）

一級、川畑熊太郎、川越吉之、中村善兵工、森田源次郎、前平利右工門、（補選）中村善兵工、森田源次郎、

二級、森永吉太郎、野村静藏、湊喜右工門、松元長左工門、堺長太郎、（補選）黒木祝右工門、湊喜右工門、別府太郎次、

第7回、明治40年4月20日（半数改選）

一級、原田四郎右工門、島廻七郎、岩下喜右工門、米満新助、（増員）池田伝右工門、坂口七太郎、木下政太郎
二級、末重休兵工、川上親喜、黒木祝右工門、安木喜太郎、（増員）加藤和次郎、南中道助次郎、山下半十、

第8回、明治43年4月20日（半数改選）

一級、山内慶治、徳田周吉、川畑熊太郎、高木喜三次、森治兵工、川崎市之助、野村伊知二、

二級、富満伊之助、山下半十、浜平林太郎、野村静藏、西村市藏、堺長太郎、松崎利左工門、

第9回、大正2年4月20日選挙

塙屋休兵工、川畑熊太郎、袴田源之丞、中村善兵工、柿木休左工門、森田源次郎、正泉寺休左工門、高木喜三次、満富吉次郎、
橋口祐吉、福重半之助、温田藤太郎

二級、塙田吉次郎、越口袈裟次郎、川崎市之助、関田秀庸、富森伊之助、堀之内善左工門、川上親喜、瀬戸口袈裟右工門、中村喜
左工門、米満新右工門、馬場新助、

第10回、大正6年4月23日選挙、

一級、堺長太郎、西浜休右工門、永重仲兵工、福重半之助、龍宝伝助、森常次郎、川畑熊太郎、柿木佐左工門、田中庄次郎、平野
五郎助、南中道助次郎、坂口留吉、

二級、袴田源之丞、原口栄樹、永治庄太郎、猿渡太郎太、中村金助、松重薰、南元正次郎、川越吉之、塙田吉次郎、宮原熊五郎、
原口庄太夫、

第11回、大正10年4月23日選挙

一級、秋窪猪之助、菌田新太郎、末永武藏、堀之内新蔵、児玉三次郎、袴田源之丞、中村善治、田中篤則、海江田三吉、永重仲兵
工、高島市兵工、中村金助、

二級、上平田長次郎、福重半之助、津之地政治、富森伊之助、古江源右工門、山内慶治、留守珍彦、米永熊助、北之園達雄、上村
徳次郎、黒木与太郎、原口庄太夫、

第12回、大正14年4月22日選挙、

川畑熊次郎、川越吉之、高木時吉、野村静藏、岡元清助、末永武藏、池之上憲政、森常次郎、西井上盛吉、古江源左工門、福重半

之助、大迫記吉、富森伊之助、原口栄樹、南中道助次郎、山内慶治、高島市兵工、東清、児玉三次郎、岩永暎右工門、蘭田新太郎、山元吉蔵、前田七郎、永重仲兵工、

第13回、昭和4年4月22日選挙

高島市兵工、笛田銀四郎、高木時吉、東清、小城裕国、川畠熊太郎、野辺泰治、高尾野半十、野間金暎、西井上盛吉、末永武蔵、蘭田新太郎、新田源之助、渡辺綱、山元吉蔵、小松袈裟次郎、岩下親志、徳田宇右工門、別府金太郎、曾山小太郎、塚田吉次郎、大迫記吉、星原休之吉、中村善治、

第14回、昭和8年4月22日選挙（隼人町）

末永武蔵、森善兵工、東清、徳田宇右工門、児玉三次郎、秋窪美、古江源右工門、山元次兵工、初瀬壯市、岩元喜之助、笛田銀四郎、林源市、森伊之吉、金床次郎吉、岩切栄助、岩永弘志、蘭田新太郎、赤塚善之助、塙拾次郎、中村善治、渡辺綱、高尾野半十、新中袈裟次郎、小城裕国、

第15回、昭和12年4月22日選挙

中村治平、徳田善吉、蘭田新太郎、新村休五郎、山口藏袈裟、久徳新蔵、森伊之吉、徳田宇右工門、森善兵工、徳田金右工門、秋窪美、大寺栄蔵、高尾野半十、米重長之丞、塙屋勇雄、橋元友則、初瀬壯市、門田市太郎、末永武蔵、古江源右工門（失格）、松崎初、塚田吉次郎、上原勇助、岩永弘志（失格）、小城裕国（繰上げ）、林源市（繰上げ）、

第16回、昭和17年5月21日選挙、

森伊之吉、久徳新蔵、林愛次郎、長福太次兵工、蘭田新太郎、末永武蔵、幸村治吉、塙屋勇雄、徳田助太郎、安木安彦、仮屋善兵工、高尾野半十、大迫記吉、笛田銀四郎、松崎初、大坪与次郎、星原休之吉、古江房吉、森安男（失格）、初瀬壯市、末広利吉、佐藤武助、川野政太郎、新村休五郎（繰上げ）、

第17回、昭和22年4月30日選挙、

森安男、上平田英哉、居細工甲吉（辞職）、笛田清蔵、野間盛熊、末永武蔵、宮田守恵、上今常盛、中村義種、塚田藤吉、林田長蔵、平田正兄、古江房吉、塙満辰之助、崎田東一、徳田善次郎、小松徹志、長福太次兵工、有村満夫、児玉三郎、幸村治吉、森伊之吉、初瀬哲志、西井上吉兵工、中島義一、山下秋男、

第18回、昭和26年4月23日選挙、

中井上善吉、崎田東一、児玉三郎、山元吉助、笠川静雄、森山重義、塙満辰之助、山下忠吉、平田正兄、坂口雅吉、久徳新蔵、森松太郎、六反政徳、原口米吉、前田鶴吉、横枕藤丸、福永国雄、徳田政市、今神春雄、中村清蔵、北田秀雄、長福半太郎（辞退）
宮田守恵、古江房吉、中村義種、田中新之助、徳田善次郎（繰上）、山口幸男（補欠選挙）、

第19回、昭和30年3月25日選挙、

荒瀬泰哉、辰元盛夫、平田正兄、山元貞秀、岩城茂樹、本重巽、上脇田操、今神春雄、新地武則、宮田守恵、浜田栄次、種子田深、
山下忠吉、平原一夫、徳田政市、山口幸男、六反政徳、瀬戸口清志、徳田茂、野間盛熊、横枕藤丸、芝常吉、松下重吉、野元馨、
浜崎栄二、崎田東一、前田鶴吉、浜崎正名、今吉市郎、伊集院孫左工門、補欠選挙、内村栄蔵、石塚一男、

第20回、昭和34年3月20日選挙、

山下忠吉、瀬戸口清志、宮田守恵、塙満辰之助、前田鶴吉、宇都信二、湊喜久、吉永吉夫、館内寿知、藤田嘉則、笛田清、花見勇
夫、新地武則、浜崎正名、神園長市、猪崎高夫、南中道進、松永良盛、辰元盛夫、本重巽、米丸藤吉、浜崎英一、野間盛熊、浜川
広、山口重喜、平原一夫、種子田深、西井上溜、横枕藤丸、伊集院孫左工門、徳田善次郎（補欠選挙）、

第21回、昭和38年4月30日選挙、

中村忠、湊喜久、徳田政市、池田栄、西園伝市、古江房吉、浜崎正名、塙満辰之助、山下秀雄、田之上隆、辰元盛夫、山口重喜、
新地武則、平田正兄、瀬戸口清志、藤田嘉則、宮田守恵、本重巽、西井上溜、小松清、泊静雄、神園長市、南中道進、

第22回、昭和42年4月28日選挙、

瀬戸口清志、塙満辰之助、徳田幸男、徳田一志、山下秀男、田之上繁、田之上隆、辰元盛夫、山口重喜、新地武則、藤田嘉則、宮
田守恵、下村正二、西井上溜、小松清、泊静雄、秋窪鉄哉、北田一衛、池田栄、本村藤夫、（補欠選挙）徳田公、川野勇、

第23回、昭和46年4月25日選挙、

上平田貢、西園伝市、米丸国雄、宮田守恵、徳田幸男、田之上隆、川野勇、堂込清三、山口重喜、末永栄、新地武則、秋窪鉄哉、
田之上繁、徳田公、徳田一志、浜崎正名、南中道進、泊静雄、下村正二、山下秀男、藤田嘉則、今村小市、池田栄、有川義春、

第24回、昭和50年4月27日選挙

藤田嘉則、堂込清三、下村正二、出水実、柳一徳、徳田幸男、船盛義雄、川野勇、本村藤夫、児玉高男、宮田守恵、川畠暁、米丸國雄、徳田公、森輝夫、西園伝市、徳田一志、塙満進、山下勝、末永栄、瀬戸口武彦、湊喜久、池田栄、秋窪鉄哉、

第25回、昭和54年4月22日選挙

藤田嘉則、大庭実、岩元応志、森文雄、堂込清三、田之上耕三、柳一徳、森輝夫、原口修、豎山哲成、徳田公、川畠暁、瀬戸口武彦、徳田一志、池田栄、山下勝、出水実、末永栄、米丸國雄、川野勇、宮田守恵、築瀬隼人、西園伝市、塙満進

第26回、昭和58年4月24日選挙

徳田和昭、森正勝、塙満進、川野勇、瀬戸口武彦、山下勝、岩元広志、柳一徳、築瀬隼人、田迈尚、福本平、原口修、川畠暁、森文雄、堂込清三、西園伝市、長命稻穂、宮田守恵、初瀬治夫、森輝夫、内田虎雄、宮内博、豎山哲成、大庭実

第1回、明治22年4月22日選挙（西襲山村）

田口七郎、園畠嘉左工門、福助次郎、古河八郎左工門、竹下武彦、井上斧右工門、鶴丸八兵工、池田吉左工門、児玉吉蔵、西田伝右工門、廣元八藏、園田彦左工門（補欠）、浜田伊兵工（補欠）

第2回、明治25年4月23日選挙、

徳丸甚右工門、最勝寺平吉、浜崎利右工門、古河藤左工門、浜田伊兵工、今村休八、

第3回、明治28年4月20日選挙

池田吉左工門、今吉太郎、川添権左工門、吉村休次郎、竹下嘉納次、古川謙十郎、田口七郎、園畠嘉左工門、

第4回、明治31年4月20日選挙、

浜崎利右工門、横山助左工門、最勝寺平吉、田口七郎、米沢嘉次郎、園畠半次郎、

第5回、明治34年4月20日改選、

松本操、石塚七太郎、山下兼雄、川路畠太郎、浜田伊兵工、古川太市右工門、

第6回、明治37年4月20日選挙

今吉市之助、隈元七太郎、古川謙十郎、西山嘉兵工、横山助左工門、石塚良助、

第7回、明治40年4月20日選挙

今村甚四郎、川添市郎左工門、米元権左工門、隈元七次郎、山下兼雄、重吉熊右工門、横山助左工門、竹之内長藏、

第8回、明治43年4月20日選挙、

隈元七太郎、横山助左工門、竹之内長藏、山下幸平次、今吉市之助、荒瀬惶夫、

第9回、大正2年4月20日選挙、

大山与之助、山下幸平次、横山助左工門、瀬戸山長吉、隈元七太郎、最勝寺平吉、今村甚四郎、荒瀬惶夫、今吉市之助、山下兼雄、荒瀬助左工門、満留畠市、

第10回、大正6年4月23日選挙、

仮屋源次郎、新原畠助、大山与之助、隈元七太郎、篠瀬覺之進、松本操、末永仁四郎、児玉喜春、横山助左工門、東市太郎、上野七次郎、荒瀬惶夫、満留畠市、今村畠太郎

第11回、大正10年4月23日選挙、

大山与之助、仮屋源次郎、東市太郎、浜田貞一、浜崎雄吉、古川沢右工門、今村畠太郎、横山助左工門、原口三太郎、重吉熊右工門、池田吉左工門、上野七次郎、

第12回、大正14年4月23日選挙、

広元藏右工門、荒瀬惶夫、竹下秀熊、下村藤市、福元畠太郎、米元畠助、上野七次郎、児玉喜春、祁答院健之助、原口三太郎、浜田貞一、追間源次郎、

第13回、昭和4年4月22日選挙、

今吉喜次郎、丸山正一、有川叶、祁答院健之助、下村市左工門、池田勇吉、徳田伊勢吉、大山庄助、福留純康、米元喜兵工、西田金左工門、川路嘉左工門、

第14回、昭和8年4月22日選挙、（日当山村）

福留純康、丸山正一、有川叶、徳田伊勢吉、米元喜兵工、池田勇吉、祁答院健之助、今吉喜次郎、大山庄助、川路喜左工門、下村市左工門、西田金左工門、

第15回、昭和12年4月22日選挙、

荒瀬金之助、有川叶、末永与吉、下村市左工門、祁答院健之助、児玉実吉、東郷吉六郎、池田徹志、林政一、松元伊之助、福留純康、今吉喜次郎、

第16回、昭和17年5月21日選挙、

有川叶、米元喜蔵、園畠七郎、有村市之助、仮屋盛右工門、園田為幸、東市太郎、下村市左工門、末永与吉、祁答院健之助、分田熊吉、米丸重行、

第17回、昭和22年4月30日選挙、

西田静雄、徳田政助、池田革助、今吉市郎、荒瀬一二、池田正博、辰元盛夫、米丸藤吉、福留純康、大山実好、有川七治、石塚一

男、迫田辰二、西山経二、米元喜蔵、福永栄治、今吉四郎、最勝寺剛藏、祁答院健之助、築瀬道哉、中須矢吉、隈元平治、

第18回、昭和26年4月23日選挙、

荒瀬正男、迫田辰二、有川叶、吉永嘉十郎、下牧純雄、福永栄治、今吉市郎、浜崎正名、石塚一男、平原一夫、馬場照代、中須矢吉、米丸藤吉、津田和親志、福留純康、岩城茂樹、有川重義、上脇田操、吉森繁、岩元広志、川崎清男、前田千秋、

第二章 人 口 動 熊

1 概 况

日当山の士族戸数12戸という島津家久の時代からはじまり、享保17年の調査記録で、郷士69人、士遊人數二八七人、用夫三五〇人、天保7年2月調査で士族一一八戸、士族人口三六六人、狩夫一三三人、慶応4年調査で、士族戸数一三〇戸、維新前8年ごとの人別調査で、調査員は一日一人米一升の支給を受けた。

昭和の初頭から年間増加は百名を前後し、女子の死亡率が男子より少なく、高齢者に女子が多い、男女ともに若い労働力が流出していることは現在と同じ傾向である。

明治維新の変革は庶民を混沌たる世情の中に押し流しながら、佐幕、勤皇の思想的底流はどう黒く渦巻いていた。明治二年（一八六九）、四藩主版籍奉還を上奏、廢仏棄釈と怒濤のように改革が推進され、奈良時代以来の神仏混淆の方式が、もろくも瓦解して行つた。鹿児島神社も從来の世襲神職制を廃止し、前神主桑幡公朝に代わり、新しく三雲四月若麿が神主として着任した。三雲

第三章 教育・文化

1 学問のすすめ

年 次	戸 数	計(人)
昭和29年	6,135	29,710
〃 30年	6,334	29,124
〃 35年	6,614	26,657
〃 45年	7,176	24,141
〃 50年	8,252	25,550
〃 55年	9,268	27,833
〃 58年	10,021	28,962
〃 59年	10,328	29,403

(各年10月1日現在)

年 次	戸 数	計(人)
昭和11年	2,822	14,163
〃 20年	3,541	17,494
〃 21年	4,198	20,143
〃 22年	4,198	20,144
〃 23年	4,222	19,908
〃 24年	4,220	20,045
〃 25年	4,160	19,705
〃 26年	4,246	19,454

(昭和26年12月末日現在)

日当山村人口動態

年 次	戸 数	男	女	計	一戸平均人數	出 生	死 亡	増 減
明治44年	582	1,797	1,840	3,637	6.2	—	—	—
昭和1年	702	1,958	1,974	3,932	5.6	177	76	101
〃 2年	706	1,830	2,113	3,943	5.6	196	85	111
〃 3年	726	1,888	1,955	3,843	5.2	165	78	87
〃 4年	739	1,934	1,930	3,864	5.2	165	77	88
〃 6年	763	1,977	2,027	4,004	5.5	176	77	99

日当山村（昭和7年）

年 齢	男	女	計
0～10	680人	675人	1,355人
11～20	537	540	1,077
21～30	431	420	851
31～40	307	315	622
41～50	202	190	392
51～60	162	168	330
61～70	120	120	240
71～80	39	60	99
81～90	7	27	34

日当山村石高

	総 高	衆 中 高
享保	2,959石	354石
天明	2,870石	422石
	(2,661)	
天保	2,810石	429石
慶応	2,173石	513石
内 割 高	東郷 820石	
	西光寺 270石	
	嘉例川 450石	
	朝日 120石	

神主は鹿児島市の人で、天保九年（一八三八）四月の出生である。着任当時は三十一歳の少壯神主で、家族同伴宮内に赴任してきた。秩禄を平均一吉に削減された社人達百数十戸から、うちひしがれた邑民に至るまで、人心の慰撫・民生の安定に努力した。沈着寡言にして、剛快、美しいあごひげをたくわえ、悠然として難局に対処した。

廢仏棄釈により弥勒院・正興寺・正国寺・正高寺の四大寺院をはじめ、草庵一字に至るまで、仏像・仏具・経典悉く破却された。僅かに残った弥勒院の一宇を利用し、旧四家を軸として明道館を開設した。不用になつた寺鐘を売却し、金一千円を得て学校の図書や設備費に充て、神職・社寺関係者の子弟百余名を集めて、祭祀に関する事項や国学を教授した。主任教師は鹿児島市の人、田中頼国、川上彦次郎、助教は当地の奥原良潔、桑幡公幸であった。明道館に就学し得ない庶民の子弟は、内、内山田、見次三邑の旧庄屋、僧侶等について、寺子屋式の教育を受けた。

明道館は明治四年で一応閉鎖になつた。偉丈夫であった三雲宮司は二十四年間その職責と学校教育に尽瘁した。三雲宮司は奇習があり、用便は廁を使用せず、降雨の時でも傘をさして、其都度場所をかえて済ましていた。

三雲宮司は妻国との間に一男三女あり、長男満若麿は明治九年生れ、陸軍士官学校卒業後陸軍大佐で退官し、昭和三十年故人となつた。長女は加治木町浜田与一郎に嫁いだが、夭死した。二女ハナは和裁教師として三邑の子女に教授し、一生嫁がずに終つた。三女イマは長姉の死後、浜田家に嫁いだ。

明治五年六月五日、権宮司から宮司に昇任、在職中、明治二十五年八月十二日逝去、享年五十五歳であつた。妻国は明治二十八年十月二十五日逝去、享年五十八歳であつた。夫妻の墓は内の旧正興寺墓地北高台にあり、朝日の有田栄吉が代々墓守をしている。付近に限ノ城登り口がある。

明治六年氏子札を造り、明道館廃止後、その跡に潮満講社を設立し、潮満講社は宮内小学校講堂設立（大正十五年）時、撤去された。潮満講社は知事等の参拝時、休憩所に充てられていた。藩主は留守邸を宿泊所とし、一行の馬繫場は、御前



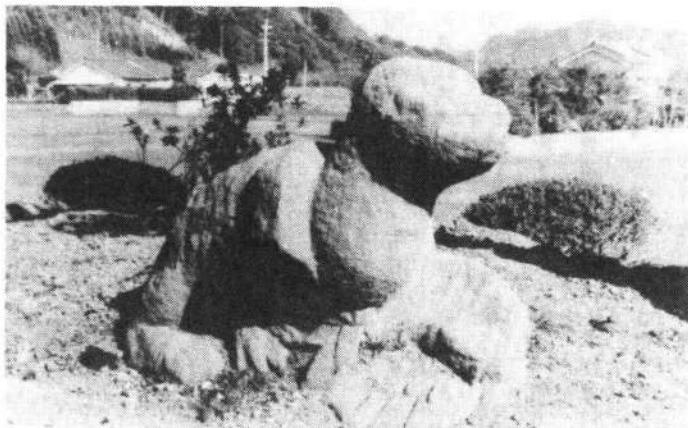
桑幡家墓地内宝筐印塔（内山田川上）

馬場東南隅の内田正秀の屋敷内で、俗に「御厩」と呼んだ。

明治四年に浜之市郵便局が開設され、襲山郷校が設立された。

明治五年秋、永野是助が文学教授所を始める。松永小学校の前身である。明治六年十二月十六日、浜之市郵便局新築。明治八年七月、諸郷校の初級一級生に正則教育を施行する。明治九年、松永文学教授所を閉鎖する。明治十一年、変則の宮内小学校設立、小田小学校、野久美田小学校創設、真孝小学校、同分校住吉小学校開設、同年三月、永野是助、松永文学教授所を開設、子弟三十余名に読み・書き・算盤を教授した。

狛 犬 (鹿児島神宮参道入口)



明治十二年三月、正則の宮内小学校が四学級、四十八名で発足し、姫城小学校、四月に松永小学校（男女六〇名）が発足、西襲山小学校に朝日、糸走分教場を置く。明治五年の学制公布による、近代的教育制度への移行は、本県の教育実情とかけ離れていて、直ちに学制の求める正則小学校開設は不可能であった。さしあたり既設の郷校を変則小学校とし、正則教員養成機関を開設、郷校教員の再教育を行い、再教育終了次第、漸次正則小学校に切り替えていった。明治九年には県下一円に正則小学校への移行が開始された。明治十年二月十二日、御廻文写第九号、「今般陸軍大将西郷隆盛外二名政府軍住吉小学校を焼く。明治十三年、宮内小学校六学級編成となる。小浜教場が創設され、教師は国分郷役場より派遣されていた。同年に浜之市新田工事が開始されている。明治十五年、真浜小学校と住吉小学校を合併して真浜小学校となる。明治十七年八月二十五日、暴風のため宮内小学校舎倒壊、十月復旧、九月二十二日、同時に倒壊した宮内の留守景次邸の門が再建されている。昭和二十六年のルース台風で倒壊し、明治十七年再建時の落書が発見された。大口の郡山八幡の文禄二年の落書に比すべきもないが、正面に「塞神三柱」とある。落書の内容は「明治十七年旧九月二十二日、造立、大工日数積六十、大金十二円也、棟アケ大工木引、大工一日二付代金二十錢ツツ、金三円八十、一、白米一升二付、金四錢五厘ツツ、一、味噌一斤二付、金二錢五厘ツツ、一、焼酎、一升二付、金十錢ツツ、一、醤

油、一升ニ付、金十錢ツツ、一、アマン、一升ニ付、金六錢ツツ、一、茶、一斤ニ付金三錢ツツ、煙草一ツニ付、金十錢ツツ、ジヨウガネ、一ツ金二十五錢、門造ノ時、ヨカオゴジョガ、御善公道ノ地田ヲユク様、年十八才、大工、鹿児島神宮御宮造立翁ヲ造、明治十七年九月二十五日、明神トマテ達、請負人、年六十才、田布施郷、遠矢勇吉、其外コンゴ、年三十才、鹿児島県、柿木藤次郎、年二十才、田布施郷、二宮八郎、年二十二才、鹿児島県、林休藏、年十七才、阿多郷、池田景次郎」とある。

小田小学校、野久美田小学校を合併、小野小学校と改称す。

明治十九年四月、小浜小学校、簡易科二年として発足、真浜小学校を富隈小学校と改称、姫城簡易科小学校と改称す。同年十月に、学校令發布で、高等科を置き、宮内尋常高等小学校と称し、尋常科、高等科各四学級とする。同年十二月、内村宇湯之元・木房「大津川原堤防之碑」がある。天降川・西光寺川合流地点（堤防）に水神碑がある。

明治二十一年、西襲山尋常小学校と改称、同年四月、町村制実施に伴い、官選戸長を廃止し、民選村長として、最勝寺半次郎西襲山村長が就任す。西国分村長は森山政徳である。

明治二十三年十二月、中福良尋常小学校を開設する。

明治二十四年二月、御真影奉戴、同年十月、勅語下賜さる。

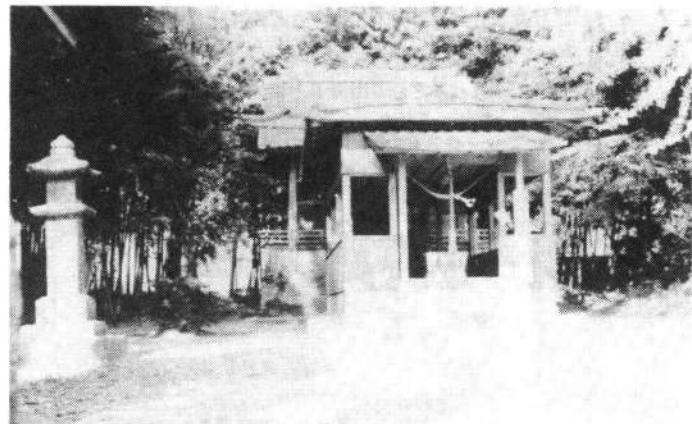
明治二十五年四月、学制改正で、宮内尋常小学校と宮内

高等小学校とを併称する。小浜尋常小学校と改称、四年生までとする。小野・富隈・姫城・松永も尋常小学校と改称する。修業年限は、尋常小学校で三年または四年とし、高等小学校で二・三年または四年とし、從来あつた小学簡易科を廃止、高等小学校に専修科、尋常高等小学校に補習科を置き、小学校の施設・設備維持を町村の責任として授業料を徴収させた。簡易小学校の尋常小学校への切り替え、高等尋常小学校の尋常小学校への指定も、町村の財政規模等により、適当に選択させた。



明治37.8年戦役従軍碑(宮内小前)

明治二十七年、西曾於郡西国分村と改称する。



今霧島神社（隼人町西光寺鳥越）

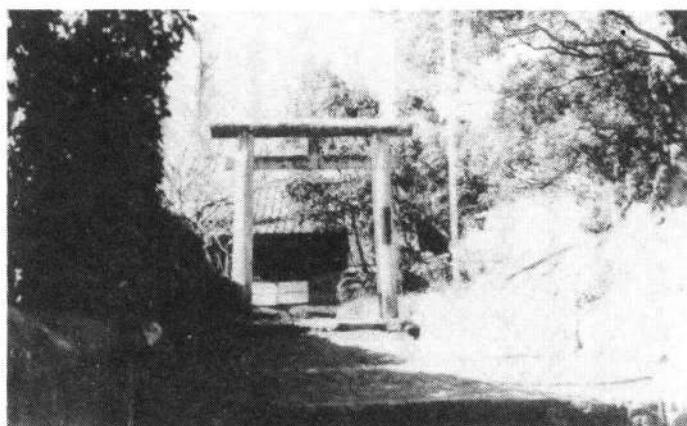
明治四十四年九月二十一日、暴風雨のため隼人駅貨物ホーム上屋倒壊。

大正三年一月十二日、桜島大爆発、午後六時三〇分の大地震後、鹿児島・重富間不通、十三日、駅日誌に「降灰積ること数寸避難者前日に倍せるにより、上り臨時列車を、隼人・吉松駅間に運転」とある。六月四日、暴風雨のため列車運転不能、八月二十日

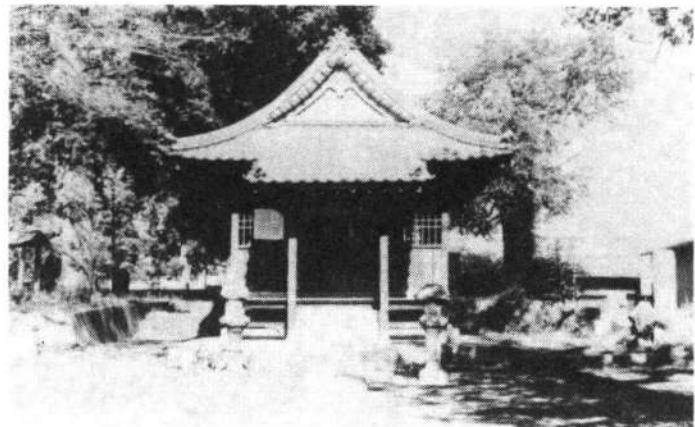
五日、暴風雨にて鹿児島・重富間不通となる。この年は頗る事故の多い年であった。大正五年に「桜島爆発堤防修築記念碑」が浜之市納屋に建設されている。東・西桜島村から約二千戸、近くの牛根村、百引村、市成村、垂水村などを加えると二千百戸程度、県の指定した移住地に新しく生活の場を求めた。希望者を募つて、血縁関係のある人々を一地区にまとめ、移住経費や一日六錢 \uparrow 八錢の食費、農機具代、小屋かけ経費、農耕用地六 \uparrow 八aなどの助成をした。中村姓がその時の浜之市への移住者で、遠く霧島山麓、小林まで移住している。学校は一週間臨時休校、宮内の人々は上野まで避難した。

大正五年四月一日、弁当触壳営業を隼人駅より鹿児島駅に移している。大正九年三月三十日、皇太子殿下、高屋山上陵御参拝、人力車にて知事先頭、東郷平八郎海軍大将、浜尾太夫ほか四十名で扈從、十月十一日、表木山駅開設、大正十四年二月二十五日、秩父宮雍仁親王高屋山上陵参拝、今回は自動車と列車を御使用す。昭和元年五月二十五日、隼人駅構内自動車営業開始す。昭和二年十月、米之津・八代間連絡成り、本線を鹿児島本線となし、旧の鹿児島線を肥薩線と改称す。昭和四年一月十三日、高松宮宣仁親王、高屋山上陵御参拝、九月一日、隼人駅が西国分駅となる。昭和五年九月十五日、西国分駅を隼人駅に改称す。明治三十六年鉄道が吉松・国分間に開通してから、終着駅は隼人駅でなく国分駅であった。以上の理由で昭和四年まで隼人駅と記録したのは実は国分駅である。しかし都城以西の日豊線と八代以南の現鹿児島本線が開通して事情が変つて來た。国分駅が国分市に移行して、旧国分駅を西国分駅と改称した。時の人蘭田新太郎は政争の渦巻く中で、火中の栗を拾つた。昭和四年十月十日、西国分村は隼人町と改称し、西襲山村は昭和五年一月一日、日当山村と改称していた。昭和十年三月、隼人塚が史蹟に指定されている。以上の情勢から蘭田町長は西国分駅を昭和五年九月十五日、即ち一年目に隼人駅に改称させた。国鉄の歴史の一頁を飾る一年駅名が「西国分駅」であった。蘭田町長の面目躍如たるものがある。

昭和七年十二月六日、国分・都城両線全通の結果、小倉・鹿児島間を日豊本線とし、八代・隼人間を肥薩線とした。同年三月には中村庄之助、中村自動車を営業す、初代



伽藍神社（真孝西馬場）



熊野神社 (隼人町真孝宇都馬場)

林田熊一が昭和四年、霧島に自動車を乗入れている。昭和十年十月四日、省営自動車国分線（隼人・古江間五十七km）営業開始。昭和十年十一月十日、今上陛下陸軍特別大演習隼人野外統監部臨御、獅子之丘で御統監遊ばさる。其處に大記念碑が建設されていたが、終戦後破壊された。同日、鹿児島神宮御神拝遊ばさる。

昭和三年三月二十四日、宮内尋常高等小学校大講堂が竣工した。工費一万六千四百円の村費用と地区民の労力奉仕で完成、工期二年であった。姶良郡内の小学校で講堂建築の嚆矢とする。教育会・教育研究会等の多い宮内小の教育を憂慮して、蘭田新太郎町長が乾坤一擲の大事業であった。同五年一月十一日に蛭兒神社社殿改築の記念碑がある。蘭田町長撰文、三島亨謹書である。富隈尋常高等小学校講堂竣工が昭和十年で郡随一の威容を誇った。

昭和十一年八月一日、鹿児島市営バスは木炭車を運転する。七月二十三日、風水害で重富→龍ヶ水、隼人→表木山、国分→霧島神宮間国鉄不通、十二月十一日、日豊本線、門司・鹿児島間に普通急行一往復新設。十二月十五日、省営自動車、浜之市支線（隼人・敷根間、九km）営業開始。隼人通運株式会社を創設す。

昭和十二年十二月十二日、国鉄宮之城線（川内→薩摩大口間）と山野線（水俣→栗野間）全通す。同年十一月、宮内尋常高等小学校、行幸記念梅林八反歩造成する。

昭和十五年七月十五日、鹿児島放送局隼人ラジオ放送所（住吉一八八二番地）を開設す。昭和十四年から昭和十六年まで、紀元二千六百年記念事業推進、「神代聖蹟高千穂宮址」をはじめ隼人塚周辺整備事業などが実施された。隼人町聖蹟顕彰会々長蘭田新太郎、委員、川野政太郎、久徳新蔵、新村休五郎、塙屋勇雄、川島経助、林愛次郎、佐藤武助、大西重俊、渡辺綱治、淨財篤志者、岡元義人、五万円、高木時吉、一万円、ほか八十九名、合計、七万九千百四十円であった。昭和十五年十一月十日、紀元二千六百年奉祝式典を鹿児島市にて挙行す。記念事業碑は宮内小梅林付近にある。

昭和十六年四月、各小学校を国民学校と改称する。四月一日、県立師範学校附属小学校で給食が実施されている。学校給食とし

て県下の嚆矢である。十二月八日、米英両国に對する宣戰の大詔渙發され、太平洋戰爭に突入した。悲惨な暗い歴史が、大日本帝国の末路を暗示するものであつた。ただ無暴な戦いの中で、疎開兒童も、動員學徒も、銃後の老若男女も、皇國日本の必勝を信じて、聖職という美しい幻想に殉じていつた。

昭和二十二年四月、敗戦の混乱の中に六三制が發足し、各國民學校は小學校に改称した。五月一日、日當山立日當山中學校發足。五月二日、隼人町立隼人中學校發足。日當山中學校中福良分校發足。昭和二十三年三月三十一日、旧隼人青年學校跡に町立隼人高等学校發足。隼人高校の前身であつた隼人青年學校は、大正十五年三月三十一日統合發足した。以前は富隈・宮内・小野・小浜の四實業補習學校があり、各小學校に附設され、教員も小學校の兼務で充当していた。蘭田新太郎校長事務取扱いで、西國分公民學校の認可を得て開設した。昭和二年四月十一日、蘭田村長、村役場を移築、浜之市から現松下病院（真孝九九八番地）に村役場移転については、移転反対派は村役場に押しかけ乱暴をはたらいた。町政發展を確信して、村長は敢然と断行した。この断がなかつたとしたら、現在の隼人町役場（昭和三十年移築）も建設不可能であつたと思う。この村役場の議事堂を校舎として使用した。昭和六年、蘭田町長の「独立校舎での教育」という宿願が実現、新校地を現隼人高校に決定、敷地四畝六歩を購入、昭和七年一月二十八日までに地均しを完了す。青年團一五八名、生徒三六七名、婦人会の奉仕による。二月九日、地鎮祭、第一期工事四千円、昭和七年四月十九日、校舎落成、議事堂より移転す。昭和八年八月十五日、町会にて実習地一反八畝十八歩購入決定、校舎南側反当五八〇円で交渉決定、昭和十年十月十八日、陸海軍大演習、聖駕奉迎記念事業として運動場予算三千円可決、隣接地にある専壳局国分出張所隼人町煙草収納所（本町煙草耕作組合で設立）の敷地分譲の好意もあつた。同収納所建築記念碑に「組合は一万八千余円の巨費を投じ、昭和八年十一月九日竣工す。大正十四年隣接日當山と提携し、設置方を其の筋に請願せり、爾來十有余年；」、「代議士、東郷実、県会議員、中馬猪之吉、前町長、蘭田新太郎、前組合長、原口栄樹、元組合長、福里半之助、隼人町煙草耕作組合長、星原休之吉、日當山煙草耕作組合長、竹下武兵工、同副組合長、川添新蔵；」大きな犠牲を払つて建設された収納所の敷地の一部も提供された。これらの母体があつたため、新制隼人高校への移行が円滑にできた。昭和二十四年三月三十一日、隼人高校日當山教場を隼人本校に合併。松永地区日當山村へ編入（霧島村より）のため、日當山中松永分教場と改称。十一月二十五日、隼人文化服装学院開設（理事長、三島正清）。昭和二十五年四月一日、隼人高校、吉松・栗野教場、分校に昇格。日当中松永教場を本校に統合。富隈婦人会立富隈幼稚園開設。四月二十三日、姶良伊佐地区教育会館落成式、工費百十万円、支部長、恒吉静雄。



小野小学校（小田森畑）

昭和二十六年四月一日、隼人高校、県立高等学校となる。栗野分校独立して栗野高等学校、吉松・横川分校は栗野高校に付設す。宮内幼稚園開設（理事長、石田円敬）。昭和二十七年三月十日、日当山保育園開設（理事長、川畠光巖）。四月一日、駅構内立壳塙満辰之助と鉄道弘済会と交代。五月四日、町立隼人保育所開設。五月九日、婦人会立、富隈幼稚園を再設立。五月三十一日、社会福祉法人、養護老人ホーム日当山春山園開園。昭和二十八年四月一日、福元実徳教育長就任。五月三日、日当山町制施行。昭和二十九年一月七日、町生活改善運動の一環として、小野小校区、七草合同祝。六月四日、隼人日当山町合併祝賀会。六月二十八日、町立隼人保育所発足（園長野辺辰雄）。昭和三十年四月一日、富隈幼稚園公立幼稚園の認可を受ける。十一月三十日、隼人町新庁舎落成式。昭和三十二年六月、町立隼人保育所園舎落成。富隈小より移転。昭和三十三年三月、日当山小、鉄筋校舎竣工。五月十日、学校給食開始（A型完全給食）。九月隼人中体育館竣工。十一月二十二日、町中央公民館落成式、工費七七五万円。昭和三十四年五月一日、隼人中特殊学級設置。昭和三十六年六月、日当山小鼓笛隊結成さる。七月十九日、隼人中ブール落成式。十月十日、第一回、隼人町民体育大会。

昭和三十七年三月、小浜小鉄筋校舎竣工、工費七二五万円。四月一日、隼人高校を隼人工業高校と改称する。青少年保護育成条例施行。四月二十五日、初瀬哲夫町長当選。六月一日、隼人ラジオ放送所、自動化運用開始。昭和三十八年二月、富隈小創立九十周年記念式典。三月十二日、環境衛生都市宣言。隼人町名譽町民条例制定。四月二十日、国立鹿児島工業高等専門学校開校。十二月一日、隼人自動車専門学校開校（設置者、岸井仁一）。十一月二十五日、社会福祉都市宣言。昭和三十九年八月二十八日、自衛艦「つげ」小島沖に入港、艦内一般見学。十二月二十五日、富隈小ブール落成式（工費四五〇万円、創立九十周年記念事業の一環）。昭和四十年一月一日、県立図書館「心に火をたく献本運動」開始。三月九日、宮内保育園開設（理事長、石田円敏）。三月十八日、「家庭の日」設定。十一月十八日、隼人町学校給食センター開設。十一月十五日、隼人町民憲章可決・制定。昭和四十一年六月十一日、隼人工業高校

ブル落成式。十月一日、社会福祉法人松永保育園開設（理事長、吉富遵）。昭和四十二年三月三十日、日当山中、特殊学級設置。

四月一日、中福良中、日当山中に統合。砂川恵路教育長就任。昭和四十三年二月七日、隼人工業高校、木工機械実習室全焼。四月一日、あさひ幼稚園開園（理事長、吉富遵）。十二月十五日、隼人町章選考委員会決定。昭和四十四年三月二十六日、国体選手強化合宿練習用温水プール竣工（工費一五〇〇万円）。昭和四十五年三月二十一日、日当山、松永、姫城三小学校閉校式。四月十一日、統合日当山小落成開校式。九月二十六日、町立体育館落成式（工費九千万円）。十二月二十三日、国分地方農村教育青年会議開催（会場町立体育館）。

2 人物

人物としては、日秀上人、空順上人、汾陽盛常、日当山侏儒、三雲四月若麿、久木村治休、横綱源氏山を挙げることができる。日秀上人、空順上人、三雲四月若麿は各論で詳述したので省略したい。

① 汾陽盛常

汾陽盛常翁頌徳碑（獅子之尾山付近）に、「抑々宮内原新田は時の郡奉行汾陽四郎兵工盛常先生曠古ノ一大事業トシテ万難ヲ排シ藩主島津公ノ許可ヲ得テ正徳元年辛卯十二月ヨリ享保元年丙申四月ニ至ル約六ヶ年ノ日子ヲ費シ延長二里半ニ亘ル用水路ヲ開拓シ各支線各施設ニ多數ノ私費ヲ投ジ遂ニ此難工事ヲ完成シ爾來日当山隼人国分ノ三ヶ村関係者ノ亨クル恩沢ハ如何ナル旱魃ニ遭遇シテモ嘗テ枯渴ノ憂ナク昭和九年未曾有ノ旱天ニモ平年作ヲ凌駕スルノ現況ニテ先生ノ此ノ難業ニ対スル感謝ノ念ハ益々切ニシテ之ガ報恩ヲ講ジツツアル折柄幸ヒ本年ハ氏ノ二百年ニ相賞スルヲ以テ此ノ地ニ頌徳碑ヲ建立シ先生ノ功德ヲ永遠ニ伝ヘントス。昭和十二年十一月十日、建築委員長、原口栄樹撰、三島亨謹書、建設者、隼人町、日当山村、国分町、灌漑面積、隼人町三七七町四反、日当山村、二五町六反、国分町、一〇町二反、明治二十二年、三村



小浜小学校（小浜古城）

共同して川堰を改修し、毎年三月、六月の二十八日には三村会合して水神祭を行い、隼人町から十名、日当山から各一名の水守を選出して、その取締りをなした。参考資料にも原文で関係文書がある。

②久木村治休

久木村治休は天保十四年十月三日誕生、隼人町住吉の山元勇右エ門の三男で幼名を勇之進と云う。人となり、剛毅にして果斷、覇氣に富む。古武士的風格の持主であった。

文久二年（一八六二）八月、生麦事件で若冠十九歳の久木村と奈良原繁が重要な役割を演じた。

明治維新後、警視庁勤務、明治九年の萩の乱、同十年の西南の役に功績あり、陸軍中尉に任官、明治二十四年、憲兵大尉として予備役編入、明治二十七年日清戦争勃発するや、志願し、第六師団に召集され、歩兵十一連隊第三中隊長、翌二十八年召集解除、明治三十七年、日露戦争勃発するや、六十歳で志願、後備歩兵第四十八連隊に応召、第六中隊長として渡満、鴨緑江軍に配属され、戦功あり、鴨緑江軍司令官、川村景明陸軍大将より感状を受く。陸軍歩兵少佐に進級、明治三十九年、召集解除予備役に編入される。妻ヨシとの間に一女サワあり、曾於郡恒吉町小田長政の四男十郎次を迎えて養子とす。昭和十二年十月二十日、九十四歳で、生誕地に近い真孝の寓居で永眠した。

養子久木村十郎次は明治二十六年六月四日誕生、陸軍中将正四位勲二等功四級、または神刀館々長として、地方子弟の育成につとめた。

③日当山侏儒

日当山郷第五代の地頭、徳田太兵工は、第十八代島津家久に仕え、頓智奇行に富み、身体矮小なるがゆえに侏儒と呼ばれ、日当山侏儒という愛称で語りつがれている。徳田太兵工は任地に赴任する居地頭ではない。

薩摩の学僧文之和尚の狂詩三首（南浦文集に抄録）

徳田拍子世無倫 弁舌猶明動四隣

観者如擣幾多少 人々席上謂之珍

滑稽幾夜撲吾鬚 戲動戯言猶以愚

人道鷹匠大兵工 看来三尺一侏儒

松田門弟徳田承 總語狂言更匠勝

如識一人兼数事 作君出會作巨承

島津家の鷹匠から日当山郷地頭となる。一休和尚、曾呂利新左エ門のように風流洒脱である。

「三味線の三すじの糸を弾いて見よ、てつんてつんと鳴く声ぞする」。「名にも似ず桜島にはつじ咲く鳥島には鳥ぞなく」。夜の霰と題して、「雪ならば梢にとめてあすもみむ夜の霰の音ばかりして」。都城、北郷殿邸で餅を咽喉にひっかけて頓死したと伝えられる。「琴（事）無きと弾いた（引いた）ならば琵琶（枇杷）の音（根）の糸切れで伐（罰）の早さよ」。「とんと落ちころりと転ぶその暇に何のお歌が出来るものかな」。「徳田どんの鴨の汁」。寛永十一年（一六三四）正月十六日、五十一歳、鹿児島市冷水町の興國寺跡の墓地に、叔父覺左エ門と二基ある。戒名、桃岩宗源居士。文之和尚は正興寺住職でもあつた。

ほかに樺山主計久初、享保十二年大目付、家老。国分地頭在任中享保十三年八月、蛭兒神社に天岩樟補植をしている。ここにあ

明治十七年三月十八日誕生、隼人町長十四年十一か月、県会

議員二期、昭和四十六年三月十三日永眠。学者で森昭阪大教授（教育哲学の権威）、大正四年浜之市の産、戦後四十haの農

地を自発的に解放した。変り種で安田敬二（福岡大教授）がいる。大正四年生れ、統計学の権威である。三代目西ノ海嘉次郎（四股名は源氏山）、明治23年真孝の産、大正13年横綱、昭和8年7月、44歳で病死。日当山温泉のバイオニア古川長吉は温泉を水車で揚湯（新求旅館・現望岳荘）、日当山千本桜を植樹した。大正四年一月廿四日、48歳で病歿。



徳田宗源之墓（鹿児島市興國寺）

第四章 交通・通信

1、郵政事業の発達

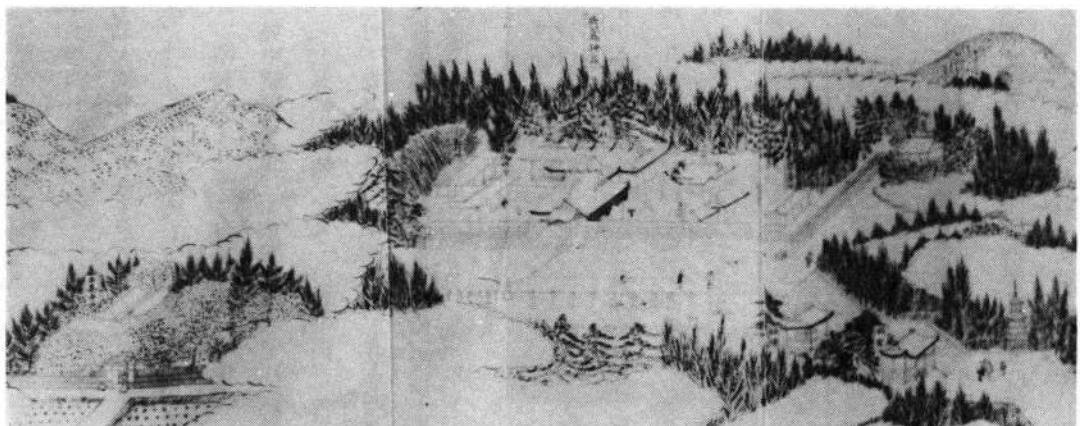
「菊は榮える、葵は枯れる」の新しい御世に変つて、人々は価値基準の混乱に不安と焦燥を覚えていた。明治五年十二月三日をもつて、明治六年一月一日に移行したことも、新春の季節に違和感があつた。職制・呼称が改正されたのみで、麓の旦那衆が、郡長、副長、里正で変わりばえがしなかつた。

明治七年十二月十六日、浜之市に郵便受取所開設（局長、森常次郎）。明治三十五年十一月十六日、西襲山郵便受取所開設（局長、最勝寺平吉）。十二月十六日、隼人駅公衆電報取扱開始。明治三十八年四月一日、西襲山郵便取扱所を日当山郵便局に改称する。大正十一年三月二十六日、浜之市郵便局舎新築す（局長、鳥居清彦）。大正十三年七月十一日、浜之市郵便局、浜之市四七番地より真孝三四二番地に移転す。昭和九年五月一日、隼人駅前郵便局開局、無集配特定局として、局長、野間佐兵工、内山田八四番地。のち内山田八七番地に新築移転す。昭和十一年八月六日、隼人局電報受付、窓口通話事務開始。八月二十三日、浜之市郵便局舎、真孝三五七番地に新築（局長、相野吉次）。昭和十一年十一月一日、隼人郵便局と改称、十一月十六日、隼人局で郵便集配事務、保険年金集金事務開始す。昭和十四年八月十五日、隼人局電報配達開始。昭和十九年十月五日、隼人駅公衆電報取扱中止。昭和三十二年、農村公衆電話設置（糸走・中福良）。昭和三十四年九月二十一日、隼人郵便局、内山田一三六番地に新築移転。十月一日、浜之市局、日当山局の交換事務を廃止統合し、隼人局にて電話交換事務開始す。農村公衆電話設置（表木山・迫間・上野・宇都）。昭和三十七年一月一日、嘉例川簡易郵便局開局。十一月一日、郵便区割統合（旧浜之市局区と清水局区の一部について）。昭和四十年九月二十一日、松永簡易郵便局開設（局長、福島親雄）。昭和四十三年三月二十五日、隼人郵便局、隼人駅前都市計画に伴つて引移転、同時に増改築。昭和四十四年三月六日、見次簡易郵便局開局（局長、堂岡行広）。姫城簡易郵便局開局（局長、福盛菊夫）。九月七日、町内電話自動化、昭和四十年九月、松永簡易郵便局（局長黒木豊）、昭和四十九年三月、小田簡易郵便局（局長新門幸英）。

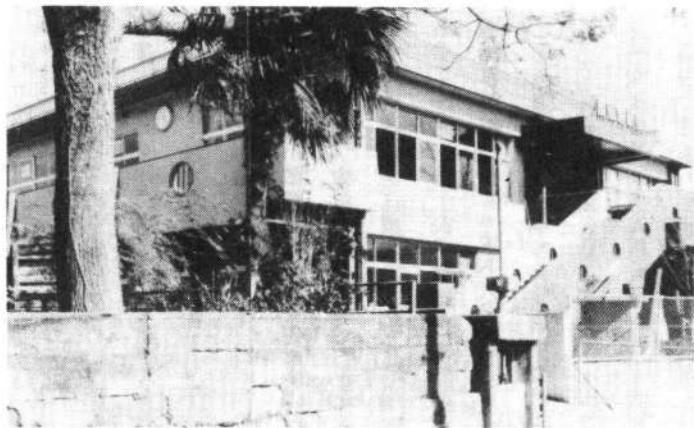
2、交通・運輸

明治二十九年、浜之市、霧島間国道開通、明治三十四年六月十日、鹿児島、国分間に鉄道開通す。明治三十六年九月、国分、吉松間に鉄道開通す。嘉例川駅営業開始、明治四十二年十一月、八代、鹿児島間に鉄道全線開通する。大正五年九月一日、表木山信号所開設。嘉例川駅より高屋山頂上陵までの県道開設す。大正九年十月十一日、表木山駅開設。浜之市、加久藤国道、県道に指定さる。昭和元年二月、山ノ湯温泉、県道間の架橋竣工す。五月二十五日、隼人駅構内自動車営業開始。昭和二年一月十五日、木ノ

峯坂改修（労役延日数一一六三〇日、換算金九三〇四円、計二三八六九円）。十月、米津、八代間鉄道開通す、田鹿児島線は肥薩線に改称す。昭和四年三月八日、朝日坂道路工事起工、労役延日数五七二九日、現金一八一八円。昭和五年九月十五日、西国分駅を隼人駅に改称。昭和七年三月、中村自動車営業開始（経営者、中村庄之助）。十月十八日、嘉例川駅前、上ノ堀間道路完成（工費四二六〇円）。十一月六日、都城、隼人間鉄道開通、日豐本線、肥薩線に改称す。昭和十年四月二十六日、松水橋架橋、十一月四日、省営自動車国分線（隼人、古江間、57km）営業開始。昭和十一年十二月十一日、日豐本線の門司、鹿児島間に普通急行一往復運転開始、十二月十五日、省営自動車浜之市支線（隼人、敷根間、9km）営業開始。隼人通運株式会社創設。昭和十二年十二月二二日、国鉄宮之城線（川内、薩摩大口間）および山野線（水俣、栗野間）開通す。昭和十四年五月二十九日、泉帶橋竣工す。日当山橋竣工も同年である。五月三十日、上小鹿野橋架橋。昭和十七年十月十四日、鉄道開通70周年記念および関門トンネル開通祝賀会。昭和二十年八月一日、隼人通運株式会社を日本通運株式会社隼人支店に改称す。昭和二十二年十月二十三日、隼人駅構内踏切警手執務。昭和二十四年六月二十四日、中村自動車商会組織を改める。昭和二十五年三月十六日、隼人駅構内で貨車18両破損す、機関士の信号無視。昭和二十六年六月十日、隼人駅開業五十周年祝賀会、十月一日、高千穂自動車株式会社開設。昭和二十八年三月七日、隼人駅構内で機関車脱線、転てつ手の不注意による。昭和二十九年六月十三日、車輛入替中に事故、十月一日、日本通運隼人支店新築落成す。昭和三十一年三月三十一日、国鉄国分線着工、五月一日、鹿児島、都城間（吉松経由）ディーゼルカー運転。九月十一日、高千穂運送株式会社、隼人駅取扱中止。昭和三十二年四月一日、旅客、荷物、貨物運賃〇、一三倍に改正。昭和三十三年二月一日、中福良駅（駅員無配置）営業開始、十月一日、



鹿児島神宮絵図（明治維新当時）



富隈小学校 (隼人町真孝御里)

日当山駅設置。昭和三十四年九月二十二日、日豊線回り博多準急ディゼルカー運転、九月、南国バス、糸走線運転開始。昭和三十五年四月二十二日、妙見大橋竣工。六月一日、準急日南号運転開始、十二月一日、準急大隅号(鹿児島、志布志間)、えびの号(鹿児島、吉松間)運転開始。昭和三十六年三月一日、宇都橋竣工。四月一日、鉄道旅客(一四・五%)、貨物(一五・〇%)値上げ。昭和三十八年三月、内山田橋架橋。八月二十九日、国道十号線、小浜、浜之市間、集中豪雨一四〇ミリで土砂くずれ。昭和四十年三月五日、国鉄運賃改正、旅客(三一・七%)、貨物(一九・〇%)四月一日特急富士号運転、隼人駅停車。昭和四十二年三月、安樂橋架橋。昭和四十三年七月十二日、妙見橋架橋。昭和四十五年四月、参宮橋復旧工事完工。八月、野口橋架橋工事着工(災害復旧)。

現在県道では次のようになっている。

①表木山、北原線(表木山、水天渕分かれ)②日当山、敷根線(隼人、停車場線(駅前通り)③表木山、停車場線(表木山、嘉例川駅)④重久、日当山線⑤崎森、隼人線(浜之市、神田橋、朝日、上野)⑥豊後迫、隼人線(松永分かれ、小鹿野、豊後迫)
⑦北永野田、小浜線(小浜、小野、隼人塚、国分)⑧隼人港線(浜之市)国道として十号線と二三三号線(住吉、安樂)が縦貫している。

第五章 風 俗

1. 農民の生活

「百姓どもは死なぬように、生きぬようにと合点して、年貢をとるように」(徳川家康)、奉行、神尾若狭守春央の「百姓と胡麻油は……」という言葉も有名である。年貢決定のときに、いちばん農民たちを緊張させたのは検見であった。秋の台風以上に恐ろしい検見「鬼神」がやってくる。「検見しよ、検見しよ、見せられるものか、検見吏代々おりやんすか」という検見よけの呪いが農

民によつて唱えられる。「百姓どもが、よく成長した稻の葉をかくすようなときは上作と思え、下作のとしは、わらの小さいのをことさらにみせて、いい立てるものだ」と年貢徵集の秘伝がある。「枠とり日和」などという言葉も「枠取」と云う下役人が、年貢のあれこぼれで世帯が良くなる。このことを天気にかけて、ばらばら雨が降つて、すぐ天気が良くなる誓に使つて。『率丸米』といつて、「枠かきで米をかきとつて量る時、股間に触つた米を不淨米として」着服した。「やまおこで、せつべこつべ……」と枠を俵にぎつしり入れさせた。

明治の小作人は「残念なもんぢや、働いても働いても、やつと生命がつなげるだけぢや」と溜息をついていた。

食生活は明治二十四・五年頃、常食は粟、甘藷を主体に極少量の白米を加えた粟飯で、塩辛い味噌汁に沢庵漬位のもの、搗いた丸麦に少しの白米を加えての飯に冷や汁をかけて食べる。麦飯が多く用いられた。いわしのめさしか、鶏卵の一つも加われば御馳走であつた。旧郷士階層も同様で、白米食は正月、盆、冠婚葬祭などに限られていて、重体の人に「白米の飯」が出たといえば、無言のうちに死を暗示していた。

明治十七・十八年頃、連年凶作が打ちつづき、甘藷すらなく、百合やすんな（野に自生する球根）などを探し求め、雜草を塩煮して飢餓を凌いだ。太平洋戦争敗戦当時の物資不足よりひどかつたと云う。

明治10年地租改正後は、荒地山林1畝（1a）が三十銭で売買され、甘藷一かがり（15g入）が二銭であった。明治20年頃まではこのような状態がつづいた。

大正の初期までは農家も商家も通常粟飯で、昭和の初期から白米が多く混入されはじめた。「ふのわるい麦は米をかるておらん」といわれ混入率も多かつた。



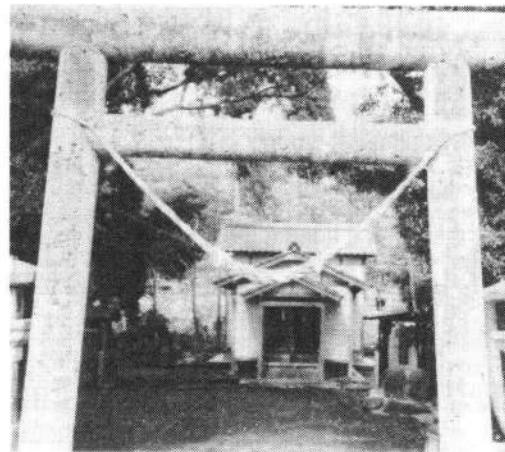
塩土翁面（小倉軍藏所蔵）



弥五郎どん面（大隅町岩川八幡）



中山神社 (野久美田松ヶ平)



早鈴神社 (小浜笛田)

酒類の王座は焼酎で明治二十年頃までは自家醸造で、地酒は稀であり、清酒やビールは昭和の初期からであつた。

日当山醸造株式会社が大正九年二月二十五日、西農山村在住の旧士族有志数名の発案により設立している。資本金十二万五千円で創設、現在二千四百万円、製造数量七二〇キロリットルである。社長は荒瀬惶夫(1)、浜崎直二(2)、最勝寺辰郎(3)、浜崎直哉(4)、児玉力男(5)である。二代社長浜崎直二は四十数年その重責にあり、地域社会の産業経済、文化の発展に寄与した功績は大きいものがある。株式会社富乃露(社長、藤崎武一)には石製の酒槽があり、長さ二二七センチ等巾一〇六センチ、深さ五五センチの加治木石である。

明治二十六年七月、「雨乞祈禱の踊りで、雨が四十二日目に降った」という趣旨の扁額が早鈴神社(小浜)に奉納されている。「西曾於郡西国分村小浜、神主休右工門、惣代、徳永休太郎、神主、上平田善右工門、同、畠中藏右工門」とあり、明治二十一年の絵馬もある。昭和九年三月、神戸早鈴同志会の奉納による華表もあり、「萩田以下三十八人、町會議員、児玉三次郎、笛田銀四郎、東清、岩永弘志、区長、小口新左工門、前区長、塙満吉之助」とある。阪神地区への伝統的進出が脈うつっている。

中山神社(野久美田)には絵馬が一枚ある。文久三年三月、末永門、坂元門等の二才中によつて奉納されている。土の匂い溢れる農民の息吹きを覚える。

大正十四年十一月三日、「浜之市八田網漁業者、発起人、瀬戸口正之助、徳田芳太郎、浜田虎助、中村七蔵、芝仁次郎、瀬戸口庄次、酒元金之助、坂元熊市、寄付者、川畠熊太郎、中村善兵、森常次郎、中村善次外三十名」の弁才天の記念碑が弁天島にある。殷賑を極めた浜之市に漸くかけりのさした時代である。海に生きた男達の意氣さかんなものがある。

海といえば、海軍大將竹下勇も住吉の産である。明治2年に山元貞義の次男として出生、大正13年、海軍大將となる。のち日本ヨット協会長、相撲協会長の要職にあつた。海軍大東郷平八郎の実兄、東郷実猗も日当山鼻切に隠栖し、明治20年8月23日永眠。

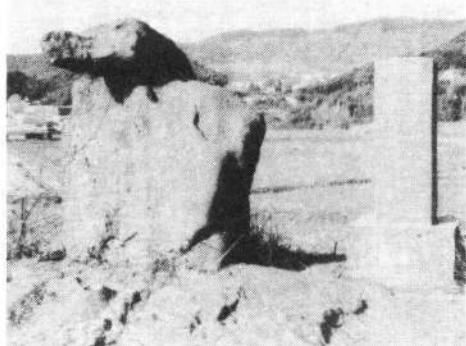
財界の偉材高木時吉は明治25年9月15日、真孝の産、株式会社旭相互銀行を創設（同仁貯金合資会社、社長堀切伊吉）、大正2年9月8日である。大正13年12月12日、鹿児島無尽合資会社（真孝三七五番地）、昭和17年2月7日鹿児島市六日町八番地に進出、金融界の重鎮として君臨し、昭和19年12月26日永眠。鹿児島神宮参道大樟横に高木時吉奉納の大石燈籠が一对ある。

郷土の自治功労者として森山政徳、山内慶治、川畑熊太郎、三島亨、原口栄樹、医学博士森田良雄（内山田）、実業界で児玉篤（長浜）蘭田新太郎、野辺辰雄、初瀬哲夫等多彩な逸材を輩出。旧国分高女校歌（北原白秋作詞・山田耕筰作曲）は高木寄贈（S5年）。

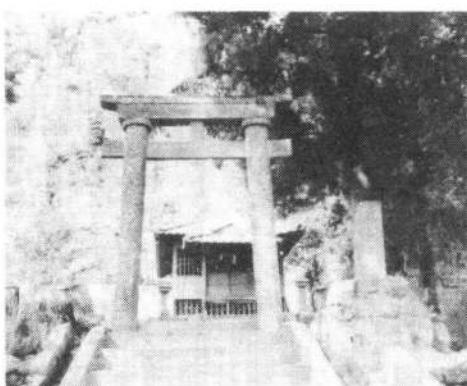
煙草も明治二十年頃までは、自家製で煙草切り包丁で刻んで、煙管につめて吸っていた。村井の「天狗煙草」など商品が売り出されたのは、その後のことである。

日当山温泉のバイオニアは古川長吉（大正4年歿、48歳）である。明治湯（現望岳荘）の経営、日当山の千本桜、水車による揚湯など、当時としては先見の明があつた。日当山温泉の隆盛を築いた人に原田盛二がいる。亀屋、大正館、山月荘と多くの旅館を建てている。紀元二千六百年記念に蛭兒神社に華表を奉納した。この華表を米軍進駐時破壊しようとした。それを制止して頑として守り抜いた。勿論アメリカに移民した経験から軍人を説得できたのである。旧制加治木中時代から英語は得意だった。

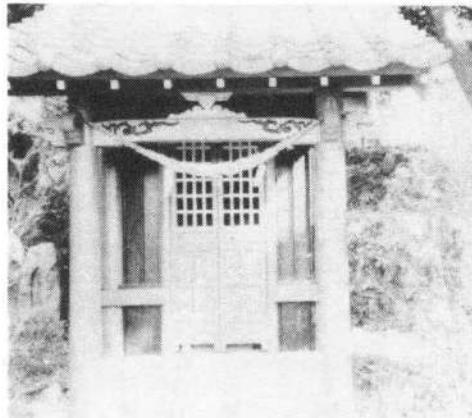
西郷隆盛が日当山温泉で湯治した時、止宿した龍宝邸がある。当主龍宝英夫は海軍少将であるが、その父伝助（慶応3年生）は西郷に炉端で抱かれた人である。その建物は湯之元の大火（昭和39年12月16日）のとき焼失した。敷地は当主の好意で町に寄附された。西郷の書に「温泉寓居、浴堂に近し。放歌乱舞、雜沓譁（かまびすし）亦甚故に戸を閉して、其の煩を避く」がある。西郷は明治3年（一八七〇）（43歳）二月、日当山温泉に浴す。藩



小浜雨乞いの碑（小浜中津田）



青木神社（小田垂水）



馬頭觀音（隼人町小牧）



六地藏塔（隼人町小牧）

主島津忠義來訪し、藩政に参与せんことを促す、大いに感激し、24日忠義に従つて帰る。明治八年（一八七五）（48歳）八月、踊温泉に浴す、十二月、日当山温泉に浴す。明治九年（一八七六）（49歳）一月、日当山温泉に在り、三条実美、西郷の興起を促す、辭して応ぜず、明治十年二月の決起に遡ること一年。日当山温泉は文政八年（一八二五）発掘、新村新三、龍宝権右エ門が湯守であつた。悠々たる西郷の生活を書蹟でみてみよう。

坂本龍馬の項でも述べたように、鹿児島から海路浜之市へ、そこから陸路を日当山温泉に至るコースがとられた。西郷に勧められて、刀創の療治と新婚旅行を兼ねて塩浸・霧島温泉を周遊している。

安永五年（一七七六）十一月二十六日、諏方神主藤原親信の記録に、「二十六日、出羽守九時乗船、唐櫃に「祈願文」を納めて、主人五人桜島の湯之戸より引船二艘で、夕方七時半に垂水の船平下に着船、社家より三、四人麻上下着装して、船俣の仮殿に奉納、客舎に案内、役人、大番頭、留主居が次々に挨拶、吸物、銚子、料理が運ばれ……」、「夜八時頃、供の者十二人が罷越し、客室、町宿に分散して宿泊す」、「島津備前、同静山、同又四郎、備前奥方、又四郎奥方の代参を完了、十二月四日、垂水出船、風悪しく延期、翌五日出船、桜島赤水に一泊、六日朝鹿児島に着船、全員帰着し、垂水屋敷に挨拶、出羽守親信に九日、樽肴、金子三百疋」、島津又四郎屋敷の神木が家作に支障があるので、切り倒したところ、靈魂の祟りがあるので、領地垂水へ移建するための神事執行であつた。

鹿児島港と浜之市港、鹿児島港と垂水港とは垂水が近い。

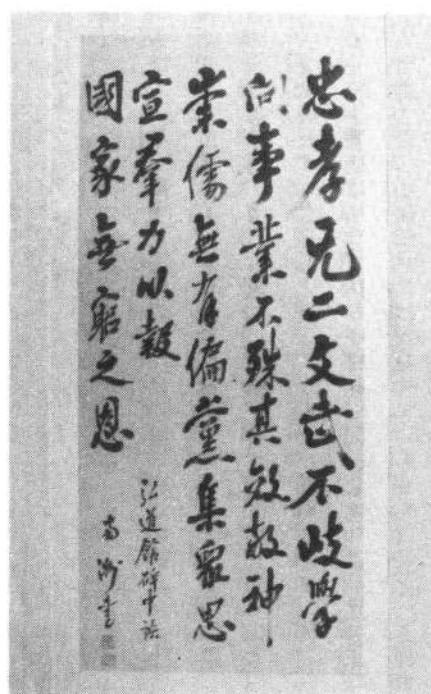
桑幡公朝（桑幡公幸の父、公幸は明治二年世襲神職廃止當時鹿児島神社神主職で百六十石）の鹿児島出立の際、事前に飛脚便を立て、出船のとき浜之市で水盃を交した。隼人と鹿児島の距離がそうさせたのである。浜之市港の突堤はL字型で、直線部千米幅員（百米）、突出部三六四米（幅員一九〇米）で、加治木、福山、牛根、垂水、古

江、根占の各港の突堤中最大の規模である。鹿児島神宮浜下りの神事執行の神領も突堤附近にある。桑幡公朝の逝去時、「上棺之儀式」が行われた。行列は木剣、木槍、木桶を携えて随行し、五色の大幡十二流が随う。一之鳥居から拝殿まで白布が敷かれ、鹿児島神宮へ訣別がなされた。告別式での最高の礼遇である。神宮参道を棺が横断することは嚴禁されていたので、それぞれ参道の左右一帯の後背地に個人の墓地が数多くあるのもそのためである。

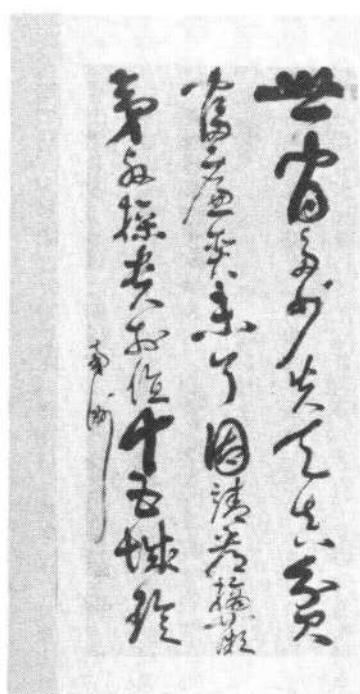
桑幡公幸は明治以降の書家としては、県下随一で、桑幡南洲と云う号である。西郷南洲の書と間違えられる理由はここにあるし公幸は好んで西郷の書を揮毫した。鹿児島県人の行くところ公幸の書があった。大陸まで進出していって、大西、郷の書として珍重された。挙句の果ては「贋造だ」と裁判沙汰になる始末、桑幡南洲にとつては極めて迷惑な結果になった。表装店はちやつかり西郷南洲の偽造印を押してサービスする。印は西郷の印と全く同一だが、一画削りとつてある。

勿論木製の三文判である。公幸は決して西郷の落款は使用していないが閑防印の「猛虎一声」などは保存されている。とにかく話題をまたた人であり、現在でも大西郷の書だと信じて所蔵している人は多い。宮内に身を隠していた鮫島白鶴が、桑原公幸の師でもある。内山田、米満文吉所蔵の「門を出すれば何處にも春色を見、平蕪みつ、歎く可きは知己無き高陽の一酒徒」（天保十一年七月）書がある。

日当山暖役の後裔松元一郎所蔵の書、「世間多少、天真を失う。貧富、廉賤いまだとらわれず、請う見よ、摘微夷叔の操、



西郷南洲書（山之内俊之蔵）



西郷南洲書（松元一郎蔵）



飯富神社（隼人町東郷瀬戸口）



弘法大師の井戸（隼人町野久美田）

値は十五城の珍より貴し。」日当山郡見回り役の後裔浜崎清（在ロスアンゼルス）所蔵の書、「忍而和すは齊家の上策、勤と僕とは良く創業を図る。」西郷が日当山に閑日月を送った時、側近にあつた人々に対して書き与えている。その人物を実によく観察し、感懷を歌いあげている。郷士年寄格の家には西郷の書が所蔵され、国分中村七太郎所蔵の「後樂先憂、范老の心」、岩切岩熊所蔵の「衆鳥高く飛び、孤雲つく」；橋口辰雄所蔵の「竹韻松濤、清自ら遠し、花觚、茗盤、静相宜し」、山之内俊久所蔵の「忠孝無二、文武岐れず、弘道館之碑」；がある。西郷の感懷、面目躍如たるものがある。西郷止宿中警固に当り、釣りや狩猟に同行したのは前述の浜崎雄助と小田伝兵工の二人であつた。小田伝兵工は長身で「いもがらばつ」と西郷は呼んでいた。国分の血氣にはやる郷士達の来訪に西郷もほと／＼手を焼いていた。泉帶橋（昭和14年）の架橋の時、国分町は反対した。理由は「青年達が日当山の遊里に行く」と云う単純な理由である。ついに架橋竣工祝賀会にも招待をけつて、国分町側は全員欠席した。政党間の軋轢があつたにしても、実に頑迷である。泉帶橋の姫城側に大正七年三月、耕地整理記念碑があり、「国を思う民の誠の固まる、この堤こそ久しからしめ」、評議員、石塚彦太郎、橋口祐士、富吉良、横山正太郎、吉丸休四郎とある。宮内の秋丸源之丞文書に「明和五年（一七六八）五月六日、正宮お田植祭で、国分と浜之市の青年が乱闘して死傷者」とある。国分宮内与頭である最勝寺勝右工門、沢喜三太、桑幡信濃守宛になつてある。華表（鳥居）から境内にかけての検断権は社寺奉行の指示をまたずに宮内支配所で決裁している。源之丞は祖父秋丸弥三右工門より「」と職権の原由を眞申している。

「今般陸軍大將西郷隆盛外二名政府専問ノ筋有之」明治十年二月十二日附、一万五千の精銳を率いて十五日鹿児島を出陣、雪を踏んでの猛進撃であつた。このとき、

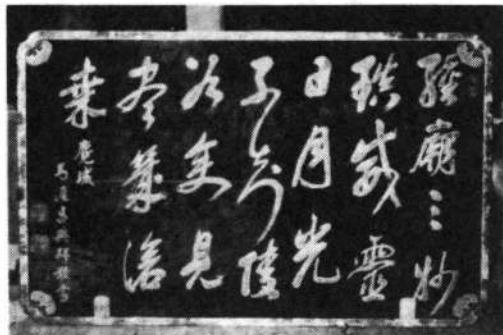
残兵三百余人、城山に落ち籠る九月一日が想像されただろうか。国分市上小川、中村文武所蔵の明治十一年三月附の「死体取寄改葬願」の断簡がある。「客年西郷隆盛の暴挙に挙し、方向を誤り從軍……」、敷根村麓百番地、堀之内実行、安樂平太郎、篠原藤蔵の連名である。この願書に対し、「墓標に止め、生年月日を記載するのは妨げなしと雖ども、式を以て白昼葬儀を行ふことを禁ず、県令岩村通俊」とある。薩摩隼人の掛声であつた、「勝てば官軍、負くれば賊軍」が現実に裏目に出た。欣喜雀躍は一転して敗残悲嘆にくれる。父や子を失つた遺族達の心情、新しい「新政厚徳」の舞台はついに回しえなかつた。泣く者がいたら、一方に笑う者もいる。戦乱のたび回船問屋は軍需景気に入つた。浜之市の船主達もブームに乗つて、順風に帆をあげた。鹿児島神宮の燈籠は、西南の役後船主達が奉納したものである。その船主達も陸上交通の発達によつて、豪商の座から転落して行つた。記念碑に昔日の面影を想起させるのみである。堤防の石は神造島の石を使用している。

衣服は自給自足で、男子は半纏に股引き、女子は半纏に腰巻である。婦女子は麻芋、綿紡ぎ、機織、布子まで一貫作業が義務であつた。蚊帳も手製の固い麻製である。明治、大正は裁縫所で和裁の教授を受けた。着物は余所行が一揃で、文字通り一張羅である。山仕事には足先だけの山草履で、畑仕事は裸足が多かつた。一般に下駄、竹皮草履、雨天や炎天下には竹皮笠、蓑が用いられた。もんべや地下足袋は昭和の產物である。戦後までコシキン・コシタエとよぶ作業上衣を使用した。

2 宗教

① 仏教

神仏混淆の時代から廢仏棄釈まで、葬儀法要は僧侶によつて行われ、貴賤を問わず死者に法名、戒名を贈つたので、仏教は庶民に深く浸透した。薩摩藩では禅宗が本流であつた。薩藩真宗禁制の理由は三つある。(a)、秀吉の征薩関係説、天正十五年秀吉が島津征伐の際、時の本願寺門主光佐が秀吉の軍に同伴西下協力し、獅子島の門徒がこれに間道を教え、ために薩軍は思わざる敗北を喫した。この結果薩藩で真宗が禁止されたとする説。(b)伊集院幸侃連坐説、慶長四年三月、伏見で島津家久によつて誅殺された権臣伊集院幸侃が真宗信者であつたため、真宗が禁止されたとする説。(c)、後小松天皇勅許説、島津家の菩提寺玉龍山福昌寺(曹洞宗)第一世住職石屋真梁禪師(伊集院出身)が奏請した結果成立したため、恩賞として、薩隅日三州と琉球に於ける真宗禁制のことを後小松天皇より許されたとする説。鹿児島大学教授桃園恵真は、「(c)の後小松天皇勅許説は年代的に齟齬が余りにはなはだしい。(a)、(b)説も夫々それに先づ真宗禁制の事実がある。(b)の説だということが明らかであります。秀吉の征薩関係説が広く流



馬渡昌興書（鹿児島神宮所蔵）



張瑞図書（鹿児島神宮所蔵）

布し根強く信ぜられているようである。島津忠良の歌、「魔のしょいか、天けんおがみ、法華宗、一向宗に数寄の小座敷」上井覚兼日記に「天正十三年（一五八五）ごろには一向宗禁止されていた」とあり、島津義弘が第一回朝鮮出兵のとき、慶長二年（一五九七）二月、「一向宗の事は、先祖以来禁止されているから」とある。伊知地季安は、天保六年（一八三五）に、伊集院幸侃が都城で一向一揆を起しただろうと。庄内で乱を起したのは幸侃の子忠真であつて、慶長四年は禁止令の後である。明治二年、廢仏棄釈の際の宮内地区は寺院堂宇が一週間に亘つてくすぶりつづけた。

a、木辺派錦織寺浜之市別院（真孝一一七番地）

明治37年創立、輪番制、現住職、七代、宇田淳志、八代、倉石法朗

b、遍照寺（内山田二二五三ノ一）、浄土真宗木辺派

昭和7年創立、一世住職、石田光愛、二世、石田円敬。石田円敬は青少年育成に功績があつた。三世、石田静香、四世、石田大敬

c、高善寺（内一四五五番地）、浄土真宗本願寺派

昭和13年創立、一世住職、林高善、現坊守、林絹子

昭和30年1月、鹿児島教区北隅組（ホクグウソ）高善寺と寺号公称認可さる。国分市川跡、正福寺説教所であつた。

②、天理教（教派神道）

a、西野分教会（野久美田五〇二番地）

明治34年3月創立、六代分教会長、久木田重和

b、千穂田分教会（内山田二〇五七番地）

大正1年10月創立、二代分教会長、種子田十郎、三代分教会長、大岩根寅男

c、隼人分教会（見次一七五二番地）

昭和11年10月創立、初代分教会長、中園アサ

d、日当山分教会（東郷一〇〇番地）

昭和11年11月創立、初代分教会長、園田サダ、二代分教会長、山田カヨ

e、天理教龍日分教会（東郷九一二番地）布教師、竹下勇

③、創価学会

恵楽寺（国分市新町一七九番地）初代住職遠竹照道

④、生長の家

3、住居

一般に家屋は平屋建、田の字の間取り、農家では、物置と厩舎を兼ねた小屋が別棟になる。この小屋は農作業に使用される。

田の字の重要な部分は「客間」であり、客間の一側に神床があり、神聖な所とされた。

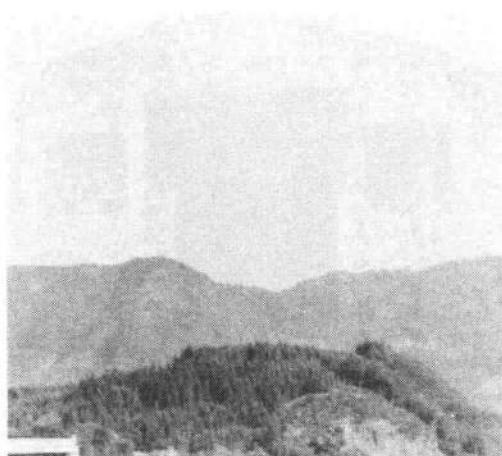
客間につづいて「中の間」、主として寝室で、祝事など来客多人数の場合、客間と併用できるようにしてある。

「中の間」につづいて、「茶の間」（ナカエ）がある。「茶の間」は一家團欒の中心になる部屋で、囲炉裏があり、婦人の針仕事など夜の仕事場にもなる。格式ばらない来客は此處で接待する。

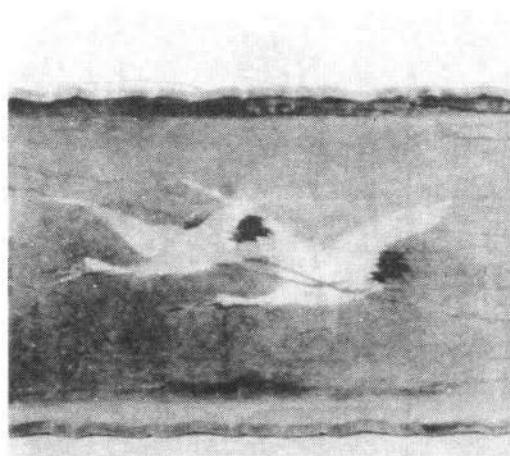
囲炉裏をめぐって、横座（主人の座）、茶座（主婦の座）があり、他は客座、トツジリ（薪の尻が出る処）などに充てられている。

昭和二十年以降、台所改善、住宅改良（電機器具等）が普及し、住宅の洋風化、快適化、冷暖房など向上してきた。

田の字型の一番奥の部屋は物置きに使用され、寝具、衣類など収納された。四



鶴ヶ城後方春山（松永園田）



旭日双鶴（鹿児島神宮所蔵）

正八幡宮符

補助 神名及 滅滅

有以久と神は阿波和心

平は先例石後神幸件

役等下着忠勤者山

大和年

正八幡宮符

(国分市、古江茂所蔵)

室のほかに、一段低い板の間を設けて、ここを「茶の間」として使用する家もある。

「茶の間」の前に土間があり、「ドツニワ」と云う。炊事など此處で済ます。現在は土間をつぶしてテーブル・椅子式の食堂に改築している為に、農作業から昼食に帰ると浴室で手足を洗って食堂に行くと云う不便もある。

室内の照明は、明治十年頃までは、種子油・椿油・茶油を用い、「コトボシ」、「行燈」が使用されていた。その後石油を用いる、「洋燈（ランプ）」「カンテラ」に変わり、一般に電燈が点燈し始めたのは、明治中期以降である。水天測発電所の竣工は明治37年11月で、鼻切地区の点燈は昭和三十年であり、最後の無燈火地区であつた。日当山駅開設に連動して施設された。

4、 娯 樂

①、神社の祭日



正八幡宮符 (垂水、中馬忠藏)

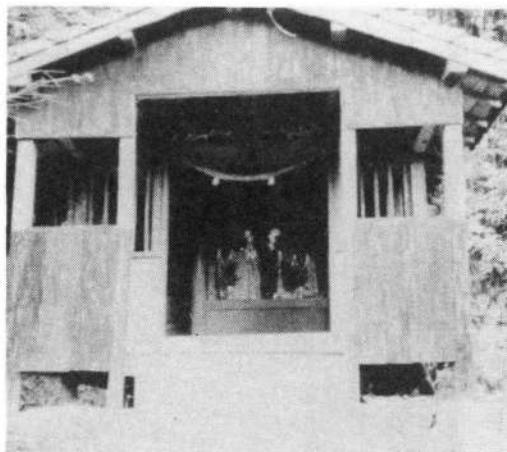
隼人町には神社が多く、各部落に大体一つの氏神などがあつて、年一・二回の祭典が行われ、国分正八幡の浜下り祭（八月十五日）、騎馬武者二六〇騎、神輿に供奉する（永和二年、一三七六、正八幡宮總大宮司北村河内守入道了覚の石清水社務記を転写）、神構（真孝、浜之市）から加治木の反土村行宮まで御旅所があつた。神馬屋敷も此處にあつた。放生会に原流がある祭で、扶桑略記に「養老四年（七二〇）九月、宇佐八幡の託宣に曰く、合戦の間、多くを殺傷す、宜く放生を修すべし」とある。「景行天皇の御代、大隅国隼人と云う者、王命に随わず、大力勇功の者にて一族数千人に及ぶ、天皇、日本武尊を副将として、隅州の宮に下り、官軍を以て攻め給うといえども終に降らず、官軍利を失い、天皇隅州御滞留数年に及び、終に隼人を討る、此隼人が神靈世上に崇り……」とある。正月十一日は御庫開之祭、大宮司

が正宮之餅を切り、諸司神官にわかつ与える（鏡開き）祭である。四月三日は蒙古退治際、「守護が参列し、八幡大神が磯良ノ神を早く召されるための御神樂を始めらる。住吉自ら拍子をとり、諏方、熱田、三島、高良五神を五人の神樂男として、豊玉姫、八乙女として舞給うなり」とある。

三月十五日、藤祭は、対岸桜島などから船を押し立てて参拝に集つた。藤祭に交付された祭神事補任状を垂水の中馬忠が保存している。

御田植祭は五月五日、新緑と日没の遅い絶好のタイミングになる。明治4年八百八組の「トド組」が参拝したという。田舎の若い男女にとつては大切な社交の一日である。「神の田なれどお田植なれば、清めの雨がざらいばらい」と田植歌を歌いながら、吹流しを竿頭高くかざし、神宮の名入りの高張提灯を押し立てて、トド組をつくり、夜を徹して幾百組となく参拝して田植をした。太平洋戦争前は14・15組に減つた。現在では2・3組という淋しさである。田の神舞は正八幡宮隼人職、小倉軍藏が唯一の伝承者である。農夫の扮装で、頭には縄あんだけ笠をかぶり、翁の面をつけ、赤たすきをかけ、飯棒（しゃもじ）と鈴を手に持ち、お囃子につれ、歌と論議を唱えながら舞う。「田ノ神は幾代の神の祖なれば、頭は白く腰は二重に（前歌）朝夕に物食う毎に豐受の神の恵を思え世の人思え世の人（後歌）」、

棒踊りは「トド組」進行の合間に行う踊りである。青年男子が櫻かけ、白鉢巻、足袋かわらじ履きの扮装で、六尺棒、三尺棒、鎌などの武具類を持って、掛け声勇ましく勇壮な演技である。現在は町内では見次・小田・小浜で伝承される。流鏑馬祭（やぶさめまつり）は九月九日であるが、文献にも見当らない。しかし正八幡であるかぎり確実に例祭の行事として騎馬で疾走しながら、標的（三箇）



大穴持神社（隼人町小牧）



古井戸遺構発掘（内山田小蘭口）

を弓射したものである。標的の距離28杖、標的の前方5から7杖を疾駆する。馬場と標的は男埒と女埒で危害防止の柵が設営される。宮内には埒姓があり、「流鏑馬」の痕跡なしとは云えない。射手は三日前、童形、雉式、弓持、的持、舍人等は前日より精進潔斎する。射手の装束は「もみ鳥帽子、直垂上下（ひたたれ、かみしも）、脚半（けはん）、桂甲（かけよろい）、行縢（むかばき）、手袋、綾蘭笠（あやいかさ）、杏太刀（くつたち）」である。この祭りは「馬競べ」の神事と類型である。その年の豊凶や早・晚稻などの植付を決定する。高山町、四十九所神社には流鏑馬が現存しているが、「三国名勝図会」では、かなりの八幡宮で行われている。同じく末吉町、住吉神社でも実施されている。

御かまど祭は旧の正月十四日で、俗にモチの市または金物市と称して、九州各地の商人が市を開き、農具、日用品を購入する。お田植祭は昔は盛大で、青年達の喧嘩も多かつた。現在は初午祭の方が賑やかである。郷土玩具、軽業、見世物、活動写真、芝居が楽隊で観客を呼び込んでいた昔の祭りは見られなくなった。田の草取りの歌、「四月五月は愚なものよ、次の六月まだ長い、草は取れども此の田の米は、どこの嫁女が来て食うやら」田植歌、「物の見事は八幡馬場よ、山たちまさり、国もさかえる。物の見事は吉田の城下、後は山で、前は大川、今日の田植の田の主殿に、八棟の倉を建てて参らす。」

強張踊りの歌、「今宵ばかりのお手枕、明日は船路の楫枕」、「千代に八千代に経るともや、動きやせまい、君が治むる国じやほどに」、「愛宕まいりに袖を引かれた、是も愛宕の御利生かな、面白や、いよのかたびら」、「何處で寄せかけたれども、はずしはせまい、差し刀の役じや程に」

太鼓踊りは、江戸参府の折、江戸市中に疫病コレラが蔓延して、防疫の術がなかつた。太鼓踊りで疫病が終息した。島津義弘が驚嘆され、朝鮮征伐凱旋記念に藩内にひろめたと云われる。義弘は元和五年（一六一九）歿。

旧五月五日はお田植祭と端午の節句の日である。富隈校区の子供達は夜中の二時頃から粽を藁づとに包んで背負い、「神功皇后三韓平」と書いた旗を押立て、法螺貝を吹き鳴らし、熊野神社から輪島神社に参拝する。宮崎県美々津の「おきよ」と同類型のものであろう。

旧正月十八日の初午祭は、正八幡宮最大の行事である。牛馬繁昌、家内安全、五穀豊穣、武運長久が祈願された。各門の名頭が馬をひいて代参し、馬にお札を貰って、青竹に挟み、自分の門を一軒／＼回って、お札を配布した。豊年予祝の祭りであり、「馬競べ」と同じである。上下の隸属関係は祭祀の時に、明確に指定される。姫城地区では戦前まで、宮座の形式が妙見社の祭礼に見ら

れた。本家が祭祀権を継承するという意味である。加治木町木田と札立に小字「八幡領」があり、用水水口に相当する。

加治木の木田郷の神馬が最優先権をもち、他の地区からの馬は徹宵で順番を待つ。現在は出場する馬も少く、トラックで運搬している。昭和36年で馬を仕立てるのに十万円かかった。昭和46年で五十万円といわれる。勿論、馬だけでなく踊り手から馬子まで飲食費、日当、化粧代を含めてである。昭和36年度にはじめて偽馬が登場した。発案者は中村栄助である。ところが、苦肉の策に對して、「伝統ある初午祭に云々」と批判もでた。しかしこの偽馬は全国を巡回して、百貨店での「観光かごしま展」でP.R.に一役買っている。張り子の馬とはいえ、あつばれな働きである。隼人駅と日当山温泉を通う客馬車、昭和十年の特別大演習の時、陛下の愛馬白雪号をつないだ樹、すべてが歴史の彼方に消えてしまった。さすがに時の流れには抗しがたいものである。昭和38年、初午祭を旧の18日から、一番近い日曜に変更した。日曜が農休日、商店の定休日として定着しはじめ、勤労者、学校、官公庁と同一歩調がとれ、家族本位の休養日になってきたからである。旧官幣大社は九州に九社、神宮号を呼称するもの五社である。戦前の國家神道の時代は、これらの神社では小祭といえども祭日の変更は厳禁されていた。戦後はあちこちの神社で祭日の変更があり、宮崎八幡宮の大祭である放生会は一ヶ月遅れの九月十五日に変更している。氏子、信仰者の希望を尊重し、変更に踏み切ったのは当時の宮司小久保光雄である。献策は東京大学教授竹内理三と筆者であった。マスコミでキャンペーンをしてくださった人は南日本新聞、編集局長久保統一であった。戦争中鹿児島県知事藤野恵が「席次」のことで、当時の宮司後藤幸平に一喝された話は有名である。一年前、昭和十五年の夏、紀元二六〇〇年記念事業として、社頭にある天業恢弘の金泥の額が奉納された。久迩宮朝融王（皇后陛下の兄宮）の直筆で、新納忠之介（鹿児島市出身）の彫刻である。同じ額が霧島神宮、新田神社、枚聞神社、照国神社、鶴嶺神社に奉納された。奉納の奉賛会員百余人で、島津忠重、島津忠承、西郷徳、上野十蔵、侯野健輔、白井松次郎、大谷竹次郎の名が見える。扁額では馬渡昌興の「経廟之妙、鎮威靈、日月光……」が明治十八年八月に、鎌田一郎、曾木愿介他二十五人で奉納されている。瑞図（張瑞図、明代書家）の「蓮莢殘雪」もある。明治天皇尊影（東京美術学校教授、海野美盛作）、奉納主、加治木町、第四世、小杉恒右工門、



熊襲の穴全景（隼人町妙見）



熊襲の穴入口付近

大正十年三月である。小杉恒右工門は神宮華表（加治木二瀬戸石）（小松文雄隸書）も明治40年に奉納している敬神家である。題字は東郷平八郎の「敵艦降伏」であつたが終戦時削除させられた。海軍大臣加藤友三郎が大正十年三月寄附した「四十口径安式十二粍砲身、一門」は現在接収されてない。

「さても見事な八幡馬場よ、鳥居にお鳩が巣をかける」「島の「こんせはんなよか嫁といやつた、島じや一番よか嫁じよ」と。南国の春のおとずれは、鈴かけ馬の三味の音で明けて行く。近年祭りの日は十万人前後の入波に参道は埋まってしまう。「この日初午、稻荷もうでしたるところ」（紀貫之集）、「今昔物語」には初午の日に稻荷山へ詣でる者が多數、「枕草子」には「稻荷に思いおこして参りたるに」とあり、初午の神事は古く、庶民的なものであつた。

正月七日は七種祭、七歳の子供の無病息災、神印の拝戴、午後三時から「ついな式」、式後、「翁舞」（塩土翁）がある。

七夕祭は旧の七月七日、宝物の風入祭（曝涼）がある。潮満珠、潮干珠を始め多くの宝物が展観できる。子供達は七夕を境内に立てる。

六月燈（和楽踊り）もあるが、特筆する祭りではないようである。

②、月待ち

郷中十戸位が毎月一回、寄合をして、月に祈る行事で、「十二夜待ち」、「二十三夜待ち」とよぶ。「庚申待ち」（こうしんまち）と同じである。かのえざるの夜に寝ると、人の腹の中にいる三匹の虫が抜け出して昇天し、天帝にその人の罪過を告げ、命が奪われるという。戦争中はとくに盛大で、月にわが子、わが夫の無事を祈つたものである。農村の大きな娯楽の一つであった。山中鹿之介でなくとも月に祈る気持は共通である。ほかに霧島講、八幡講、田ノ神講など報恩感謝の小宴が郷中で行われる。霧島講は霧島神宮の大祭、九月十九日に講の代表が一・三人参拝し、神札を拝受し、持ち帰り、講を開いて、各戸に配布し、竹に挟んで道角や田畠の要所に立てる風習がある。

③、花見

眺望のよい場所に郷中打ち連れて、小宴を開く。

④、宮ごもり

氏子、郷中で、鹿児島神宮拝殿などで宴会をする。明治二十五年頃から拝殿使用は禁止された。

⑤、花火

明治40年頃までは各郷で行われていた。現在日当山温泉の花火大会が盛大である。中興の人は中村栄助とそのグループである。

⑥、座頭、瞽女

明治24年頃までは、年に一・二回門付けに座頭、瞽女が来た。いわゆる、「川辺ざつ」、「知覧ごぜ」で、男は琵琶、女は三味線を持っている。鹿児島では「カトクドン」と呼ぶ。乞食ではなくて、厳格な戒律で旅に出て、琵琶歌、軍談（さいもん）、段物（芝居物語り）などを披露する。

5 家庭年中行事

①、正月行事

a、各家庭は必ず門口にシメ飾と松飾を立派にし、祝の気持を深くするため念入りにこれをつくった。また室内では、白紙に裏白、ゆずり葉をしき並べ、重ね餅、上に橙をのせた祝の鏡餅を神棚、仏前、床の間、机、かまど、農具などに供えるが、中には、大根その他の野菜類を以て巧みに作ったシメ飾を居室の一隅などに懸けるならわしの家もあった。

b、正月早々より、遅くとも松ノ内といわれる七日頃までの間に、年頭回りとて、親戚や親しい近隣互に祝の挨拶に出向き、正月料理の馳走になるのを楽しみとし、また欠き得ぬ家々に札回りをしたものである。

c、旧正月十四日は、もちの市の行はれる日で、家庭では、榎の木の枝などに方一寸（三・三センチ）位の切餅を数多くつけて、室の一隅に懸けるならわしがあった。

②、三月

三月三日の節句には、各家庭でコレ菓子、羊羹など腕を振つて熱心に菓子つくりが行われ、神仏に供え、親戚や近所へも配り、

出来ばえを自慢する風さえあつた。雛人形を飾るのは、素朴なものながら現在と同じであつた。

③、五月

五月五日の節句には、竹の皮包みのアクマキ、チマキつくりは、各家庭必ず欠かさなかつた。また幡ノボリ、鯉ノボリは四月八日頃より長期立てたものである。

④、盆祭

盆の行事は、家庭により幾分違いはあつたが、十三日は精靈迎えで、単にお茶、お菓子を供え、十四日は、ボタ餅と精進料理、十五日は、赤飯、ソウメン、一口ダンゴなどを供えた。また、十四・十五の両日は、墓地に燈籠ともしを行つた。

⑤、豊歳祝

九月十九日は、豊歳祝で、自家製のコーヒーで甘酒をつくり、赤飯をたいて神仏へ供え、親戚友人などを招きもてなした。

⑥、内神祭

神道の家では、十一月中に内神祭りとて、種々馳走料理をつくり、神職を招いて内神、祖靈、水神等の祭典を営むのが常であつた。これは現在でもおおかたの家で行われているようである。

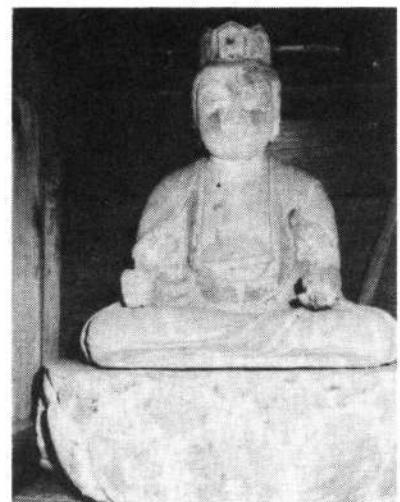
あるいは廃止の運命をもつものがあるようである。菓子・料理等手作りから店屋物に変つて行く。

孝子としては見次、末永袈裟右エ門（幕末の人）。安政五年（一八五八）歿、享年85歳。小浜、別府太左エ門の長女ケサズルがいる。湊森右エ門に嫁ぐ。真孝、喜助とその妻亀松も孝子美談として有名である。明治では浜之市の中村ツナ、小田の野村新助、原田アキ、野久美田の久木田トミ、古江善吉などが表彰されている。

郷土玩具を伝承する人に宮路武二、三島義則がいる。「農村の幸福と繁榮のつづくかぎり、玩具をつくる」と云う。「ハツツツミ」



廣目天像（小牧大穴持神社）



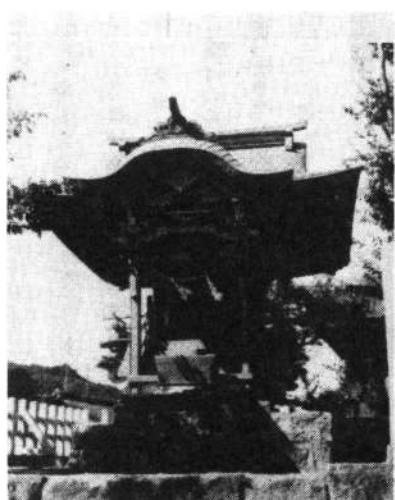
虚空藏菩薩（小牧大穴持神社）

は子供の玩具であつた。和紙の鼓面におどる豆の音には、日本人らしい暖かい心情のリズムがある。海幸、山幸の神々が、あかね色の空から投げる、早春の足音である。「初鼓」の鼓面を色どる赤、黄、緑の三原色は南国の色彩だ。紺を流したように澄んだ国分平野の空に、パツとにぎやかな春のデザインを繰り広げる。土鈴のあざやかな朱の色は、南の島々のソテツの実によく似ている。鯛車は彦火火出見尊の釣針を呑んだ赤目魚に因んだもので、化粧箱は豊玉姫が入興の時に持参された化粧箱という。旧三月十日の藤祭は尊がワタツミの国からお帰りになつた時、藤の花が満開であつたという故事によつたものである。桜島の人達が船で参拝にくる。その日は海魚（ヒウチなど）まで頭を鹿児島神宮の方に向けるという。

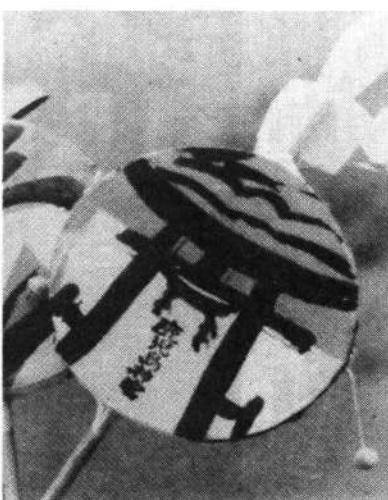
海幸、山幸の神話に出てくる「聖蹟獅子之丘」も記念碑だけで、丘はくずされている。小田、竹原の岩神、小田、弘法大師の井戸、上野地区の天水桶、朝日地区の筧も次第に壊滅、衰微して行く。日当山の東林寺、日当山、西光寺、糸走、新空港の新しい道路建設で、この地区の風致、文化財はまた壊滅するであろう。西光寺の遺跡は全く廃滅した。

日当山城をすぎ、西光寺に日吉山王社がある。旧西光寺の寺域である。西光寺は別当坊（山王前）、円蔵坊（川添巖宅）、正覺坊（南川内の杉山）、正覺坊（南川内の杉山）、普門坊、脇之坊（浜田満雄宅）、田中坊（有川澄男宅）、善淋坊（牧源治宅）、咸陽坊（松元博文宅）、白坂坊（公民館）、清涼坊（川添勝男宅）、下神鋤坊（消防倉庫）、比覺殿坊（浜田貞義宅）、三覺坊の寺院があつた。地理志には西光寺鐘銘に「弘長三年（一二六三）九月十二日、大檀那沙弥西念」（文応元年、国分寺文書に守護代沙弥西念）とある。

万寿山東林寺は福昌寺（曹洞宗）の末寺、島津義久が国分城に在住の頃、正室実溪夫人のため建立した。寛政十年（一七九八）四月八日の火災で、記録の全部を焼失している。夫人の位牌追悼の儀として、五十年に一度強張踊を朝日、西光寺、東郷の衆中が集つて張行した。二百五十年まで続いたといふ。



保食神社（内辻ノ角）



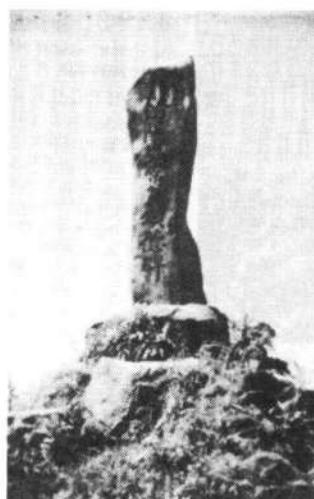
初鼓

強張踊は文禄四年（一五九五）、島津義久が富隈城に移徒の際、御城普請を諸士に仰付けられ、荷担ぎして加勢をした。この時、「実に強張のことよ」の御意あり、これを以て強張踊と命名した。しかし清水村史には、「慶長元年（一五六）富隈へ御移りの時、御祝儀として土踊を御上覧に供へ候處、強力業之負物：「其後国分、曾於郡、敷根、日当山、踊の五か所同断に仕り来り候」とある。やや趣を異にしている。「強張踊の行列の次第」として、鐘、太鼓はいずれも軍中の装束にて、九字又は七五三と表し踊仕り候」、楞嚴寺（島津忠将の菩提寺）御靈前、鶴翼直の備（つるのはがえしのそなえ）、縁籠（くりこみ）、縁出（くりだし）の図解と歌が記録されている。永禄四年（一五六二）七月十二日戦死の島津右馬頭忠将（第15代、島津貴久の弟）の墓（心翁大安大居士）は空襲時被爆して、楞嚴寺の墓地にはない。父忠良・兄貴久の制止をふり切つて深追いし、斬殺された勇将である。戦死した現地、福山町中ノ茶屋典厩坂にも墓碑がある。

日当山名物であつた草競馬場も家畜市場になり、今年移転した。70年代の技術革新の波は、刻々変革、変容してしまつ。中須公民館に水害時のボートが準備されていたが、堤防の完成で無用となつて消失した。

昭和47年度の鹿児島国体に向けて、隼人町も装いを一変して行く。建設と破壊という宿命のなかで、文化財を守つて行くことは大変なことであろう。

住民ひとりひとりが文化遺産を守り、後世に伝える自覚と態度が大切である。町内の廃寺は靈鷲山正興寺、臨済宗建仁寺派、開山弘智円応禪師、宝来山成菩提院正高寺、真言宗、開山一慶上人、梅靈山無量寿院正国寺、律宗、開山円秀和尚、鷲峯山靈鷲山寺弥勒院、天台宗、開山性空上人、金峯山神照寺三光院、真言宗、開山日秀上人、補陀洛山正護寺密常院、日秀上人、獅子尾山正福院觀音寺、日秀上人、笑隈山正行寺、時宗念佛寺派、行玄上人、日当山淨土院西光寺、万寿山東林寺、富隈山心王院童蓮寺、和光山見隆寺（法華宗）などがあつた。



汾陽盛常記念碑（内山田獅子之尾）



琴柱型燈籠（鹿児島神宮）

富隈城（旧面積約二十萬m²）の旧天守部分（実際に天守閣存在せず）付近に稻荷神社がある。第六代島津氏久が始祖島津忠久を祭祀し、付近を住吉崎と呼ぶ、美しい松林の続く砂浜があつた。

稻荷神社石段近くに献燈一対がある。「改築奉讃会長川畠熊太郎家内一同、昭和十四年六月吉祥日」とある。

鳥居左側に改築記念碑、海軍大将竹下勇書の石碑があり、碑文に「當稻荷神社ノ舊社殿ハ一一七年前文政七年七月、島津齊興公ノ御造営ニシテ、本殿・拝殿共甚ダシク腐朽シタルヲ以テ、適皇紀二六〇〇年ヲ記念トシ之が改築ヲ行ヒタルモノナリ。起工昭和十三年七月七日、竣工昭和十四年四月二十九日、總工費 六千五百五拾余円、労力、氏子及ヒ青年学校生徒、富隈小兒童奉仕。昭和十四年四月二十九日建設、設計者隼人町住吉栄次、建築委員川畠熊太郎、徳田宗右衛門、森伊之吉、久徳新蔵、重西一熊吉、徳田助太郎、川畠篤、川畠貞右衛門、徳田太郎吉、木下政治、吉元傳助、松元亀助、久保熊市、池田畠助、山元末吉、寺園熊市、池田軍次、森重吉、請負者 鹿屋町税所亀次郎、大工鹿屋町税所栄熊、石工東国分福山嘉一、隼人町池田傳、山口忠雄。」とある。

真孝の中心は下之馬場（国道十号線）、上之馬場（松下病院・旧隼人町役場）西之馬場（伽藍神社の線）、東之馬場（熊野神社）に囲まれた地区であり、その主軸線が船堀（浜之市港・神湊）、納屋、熊野神社、隼人塚（菩提寺跡）の道路と、隼人塚から伽藍神社、本町への西之馬場の道路で、特に西之馬場は南中し、辺田小島と桜島南岳を結ぶ放生会の聖なる道であつた。伽藍神社が東・南に面し、鑰島神社が西北に面し、稻荷神社・熊野神社の南面と大きな差違があるが、真孝即ち神湊（港）の四方を囲む神社と見れば肯けるし、特に鑰島神社は鹿児島神宮との関連があり、永く桑幡公秀社家が社掌を継承した。熊野神社の境内入口に仁王像一対がある。

海上神・宗像三女神は奥津島（沖ノ島）・中津島（大島）・辺津島（田島）に、田心（多紀理）姫・田湍（多岐津）姫・市杵島（狭依）姫を祀る。第三女いちきしま姫は神武天皇の伯母に当る。このいちきしま姫は最初の海上神として嚴島神社の中心神となつてゐる。宗像即ち玄海町神湊に祀る。慶長年間、今の田島に遷宮された。「神湊村、岬村ノ西南一里（三十六町・三九二七m）、田島村ノ北半里、宗像川ココニ注グ」、湊町ハ川ノ西畔ニテ、ソノ東岸ヲ江口ト云フ」。

続風土記に「神湊ノ民衆ノ東ニ海辺宮（辺津宮）ノ跡アリ、神幸ト名ヅク、コノ湊ハ、中津島（大島）、沖ツ島尼船ヲ渡シ、彼ノ島々ヨリモ船ヲ著クル故、神湊ト名付ケシナラン。真孝という地名を考察するうえで参考になる。石燈籠の献燈「中村善兵衛、昭和十四年三月」があり、「奉寄進、文政七年（一八二四）申七月七日」の石燈籠、「奉寄進、文政七年（一八二四）申申七月七日」

の献燈、鳥居付近に、「熊野社献燈、高木時吉、石工児玉平次郎、昭和八年七月吉日」の献燈、「奉納東宮殿下御成婚記念、還暦中村善兵衛、石垣一七〇間、石工児玉平次郎、馬場彦次郎、馬場喜代次、大正十三年甲子三月建設」の記念碑がある。

明治二十九年（一八九六）丙申三月建設の「第二回縣道変更願、惣代中」の記念碑がある。明治二十八年四月、日清戦争平和克服、鹿児島神宮幣大社昇格、富隈尋常小より富隈尋常高等小への昇格、明治二十九年は始良・曾於・桑原郡を始良郡に合同し、西襲山郷を西襲山村（後の日当山町）に改称、浜之市・川尻の両新田完成、とくに浜之市・霧島間の国道開通など戦後の国威発揚期に当る。

国道変更記念碑は「濱之市納屋町、森嘉兵次、森安之助、中村彌兵衛、森治兵衛、芝鹿兵衛、満留茂兵衛、中村金助、中村善兵衛、中村善左衛門、有川貞右衛門、芝甚兵衛、田中貞右衛門、中庄村右衛門、芝善吉、芝彦兵衛、大山金次郎、徳田信定、有志中原勇一、内村、川畠武兵衛」である。

石燈籠献燈「七十三歳森仁石衛門、六十六歳平次、六十四歳森右衛門、明治二十三年十一月建之」がある。

社殿右側に社殿改築記念碑がある。碑文は「改築奉賛会、三輪藤磨、中村清藏、芝松廣、池ノ上喜代治、坂口金助、山口藏袈裟、山口重喜、徳田金右衛門、宮原藤一郎、徳田鶴吉、立山藏市、中馬喜次郎、芝長吉、池田耕作、植山新、森虎吉、芝喜太郎、川野政吉、芝常吉、若松三好、岩元安雄、瀬戸口庄吉、瀬戸口庄市、徳田八百吉、是枝辰之助、徳田為次郎、有川三之助、若松平、芝伝、住吉喜八、設計山口孝、矢野源吉、昭和二十九年四月五日」とある。

亭々たるいちようの木（約七百年生）の落葉が散りしいてる熊野神社奥に「濱之市納屋町二才中」の石塔の横に、寛政十一年（一七九九）己未十一月、隅州後学徳持清登の石碑がある。富隈城大手口付近（鳥居）の隅州富隈新松林記と双牌であるが、刻字が殆んど摩滅して判読し難い。「：於主吏今植：此富隈後來莫採薪出入之禁也思兮。華公放戴徳政之経國既深厚則彌語維莫採薪之禁敢忍久斧斤於其蔭哉。往時華公美行唐國在文王作山……客旅……古如是故各處名區……義彰……隅州後学徳持清登。」と判読できる。

賽銭箱に「奉寄進、芝松治、坂口金助、昭和二十九年四月、社殿竣工記念」とある。

正確には熊野神社が真孝と納屋町との境界になつており、社殿は南面して建つてゐる。

伽藍神社は西之馬場に沿つて東面する位置に社殿があり、標号標に「和銅元年、正八幡宮放生大会」との添書きがある。

鳥居は「昭和六年一月四日、奉納者石工福永国政、立山袈裟助」とある。記念碑に「川上親喜、徳田畠助、川越吉之、李田岩次

郎、海江田三吉、三宅十郎、山口仁兵衛、高木喜三次、山口善左衛門、大庭正、三輪藤左衛門、山元喜左衛門、池ノ上俊、徳田李左衛門、星原伊左衛門、明治十四年三月七日」とあり、境内に七百年位いの楠が一本あり、社殿は東面している。

鎧島神社は国衛の印や不動倉などや、神社・神主家の印などを特に神聖視して祭祀された神社であったが、国衛の衰退と運命を同一にしている感がある。

天文十一年の勅使四辻参議中将季遠の国分寺納経時、天文二〇年の正八幡宮御尊体を樺山立佐が奉持、浜之市に上陸した時点で一時奉安された頃が最高の時代だったと思われる。

境内に「大正三年、土地壱反九畝」の記念碑があり、桜島爆発時、避難民を受け入れた地区らしい記念碑である。此処の出身である西の海嘉次郎の記念碑がある。「一八九〇—一九三三年、大正の横綱三十代目、本名松山伊勢助、二十歳で井筒部屋に入門、大正十二年横綱免許、六尺五寸、三十一貫、得意は双差しとのど輪攻め」とあり、同じく西の海記念碑建設委員会の碑文に「会長初瀬哲夫、副会長山元斉、瀬戸口清、最勝寺辰郎、浜崎正名、前田礼之輔、上平田貢、有村満雄、岩永義雄、永田栄蔵、瀬戸口信雄、北川春彦、堅山哲哉、田辺肇、委員瀬戸口武彦、塚田吉一、顧問藤田嘉則、松山小次郎、赤塚経藏、岩重利行」とあり、卅代横綱西の海顕彰碑は鹿児島県知事寺園勝志書である。

浜之市納屋町に桜島爆発記念碑がある。「大正三年一月十二日午前十時櫻島爆発噴煙天蔽フ、須臾ニシテ雷鳴震動灰降リ、島澎全ク見エス実ニ空前ノ椿事タリ、同年八月廿三・四日ノ暴風ハ高潮ヲ伴ヒ、海岸一帯ノ防波堤ヲ決済シ濱之市海岸家屋浸水六十余戸、其ノ惨状言語ニ絶ス、茲ニ有志相謀リ護岸復旧工事ヲ計画シ縣費一金ヲ得テ大正四年二月二十六日起工、同年六月三十日竣工シ、續テ北岸堤防内面積四反歩余ノ埋立工事ニ着手シ、翌五年一月十日落成セリ。茲ニ於テ港湾ハ忽チ旧觀ニ改マリ曩日ノ不便不浸ヲ見ス。此ノ地ニ利便タル者須ク功劳ヲ追憶セヨ。村長三島亨、有志川畠熊太郎、委員森治兵衛、中村金助、中村善兵衛、徳田信吾、森藤吉、池田傳右衛門、満留吉次郎、塚田吉次郎、山元次兵衛、森常次郎、大正五年十一月建之」である。

浜之市納屋町子中のえびす、弁財天を安置した大正九年十月建之の石祠もある。

新川河口揚水所に記念碑一基あり、昭和三十四年十月八日建設になっている。

浜之市納屋堤防に石祠が一基ある。「新天山之神・水天田之神敬白、中央に梵字、アン（普賢菩薩）があり、背面に「掛郷士年寄、市来新助、右同郡見廻、新橋蔵之進、右同用水掛、中村権五郎、掛奉行、汾陽次兵衛、掛郷方検者、石原金兵衛、

右同定數檢者 一 兵衛、當御神田寛政七乙卯歲（一七九五）從五月發起同十二己未歲（一七九九）至五月成就之凡田町五拾八町程因、謹崇四神石社以萬古不易為守御敬立之旨享和元辛酉歲（一八〇一）御普請掛相中、基壇の部分に、住吉村庄屋、鮫島孫八、名主新太郎、右同助兵衛、右同權右衛門、用水掛下役源八、真孝村庄屋、宮原藤左衛門、名主長助、用水下役新一とある（参考資料編）。

国分市広瀬の大穴持神社も上小牧の大穴持神社と何かの由縁があると思われる。小牧台上より眼下に神造島が展望できる。「献燈、上原源兵衛供昂、同地方檢者伊地知八四郎季桓、右同田代善 清、奉寄進、弘化四丁未（一八四七）八月二十五」。同じく「堤防復舊記念碑、大正六年十一月建設、堤防工事請負人、鹿児島市末広康次郎」、「堤塘竣工記念碑、昭和二十九年三月、元參議院議員中馬猪之吉書、堤塘工事請負人鹿児島市高麗町吉留産業株式会社々長吉留善」、社号標は「昭和五年六月廿五日建設、大穴持神社、延喜式内社宝龜九年（七七八）十二月御創建、請負石工福山嘉一」とある。国道十号線沿いに、「小村新田干拓記念碑、昭和十一年二月建設」と、弘化四（一八四七）丁未七月二十八日の石祠、明治九（一八七六）丙子年九月二十日の保食神、田之神が各一基宛ある。（参考資料篇）

向花小学校前の池田静左衛門宅内（国分市府中一六八一番地、九十三歳）に一字一石経がある。「天明六（一七八六）龍集内午天、奉書寫大乘妙法部一字一石供養就處、卯月大吉祥日、寺師坊、講代坊、大覺坊、講師坊、香乘坊、智定坊、成蹊坊、宗園坊、願主祝子太夫、施主李之丞」とあり、樺山家、税所家、山田家、西家、崎田家、龍波見家系の合同祭祀となつており、正八幡宮衆徒十五坊の殿上方と講師方から各四坊宛参加している。

鹿児島神宮（正八幡宮）と府中とを結ぶ參宮橋の線上に祓戸神社（守公神社）や景色の杜があり、国衛の設置されていた時代の官庁区域に該当する。

池田家の棕の古木の下に三基の五輪塔（但し地輪が宝塔の軸部形式）があるが、「安永四歳末（一七七五）六月廿二日、高岳貴胤居士」と年月日摩滅の「心月妙圓大師」と「安永六丁酉天（一七七七）五月廿四日、覺知良圓居士」である。

一字一石供養塔は泥熔岩（小浜石？）で文字は殆んど風化し、梵字（大日三尊）のみ判然としている。小浜、早鈴神社境内には多くの記念碑がある。

「宝曆十一己八月吉日、一町畠、鳥門、金左衛門、奉寄進」の石祠がある。華表左右に「昭和七年三月吉日の献燈、同じく「大正

三年二月十九日、児玉平次郎、献燈」、大正八・九年生、小濱同窓会、六反清治、馬場晴雄、西浜政治、別府純男、田之上武徳、安木義則、山元重盛、福重正清、笛田武則、湊敏徳、湊喜久、塙満義雄、塙満秋男、下小牧清一、東豊則、昭和五十五年三月吉日之建納、宮司、斜木儀光」とある。華表は「奉獻、昭和九年三月十日、神戸早鈴同志会」とあり、石塔の身部に「欽奉造立、庚申仲春吉祥所中、謹奉造立」、等の石塔もある。

昭和九年三月十日の記念碑には「荻田浩久、山元貞吉、北田吉太郎、塙屋猪之助、岩下七右衛門、児玉鹿右衛門、大迫三次郎、川野貞助、山元松雄、六反重夫、山元友一、大岩根末吉、安木休之丞、湊満哉、笛田清治、山元時義、小濱秋吉、西村重行、塙屋磯吉、塙満一雄、南道工、六反新一、大岩根清、小浜敬一、安木時藏、児玉進、山下秀男、岩下一郎、大岩根一、六反新吾、笛田五男、西村千尋、一斉義行、小浜清美、六反栄吉、越迫辰二、元勇一、大岩根広次、町会議員、児玉三次郎、笛田銀四郎、東清、岩永弘志、区長、小園新左衛門、前区長、塙満吉之助、請負人、石工、児玉平次郎、馬場彦次郎」とある。

八幡市愛友会、小濱出身の昭和七年三月吉日の記念献燈には「岩下庄市、馬場義徳、福重前吉、永治政義、石工、児玉平次郎、馬場杉次」とある。

早鈴神社の華表は鹿児島神宮の華表と同様の加治木日木山の二瀬戸石である。神社は小字「笛田」にあり、裏の山手が「沖ノ元」、日豊線より海岸に向って、右側が「上里」（旧役場支所）、「下里」、「湊」で、左側は「八反田」、「六反田」、「網屋セソ」（隼人町農協小浜支所）、「馬場」の小字である。

文久二年（一八六二）壬戌九月一日、奉寄進、小原八郎太、六反田門助藏、崎門四郎左衛門、斜木源左衛門、畠中門、新兵衛、雨乞祈禱宮蒙り拾式度内オドリ拾度、奉寄進五月ヨリ六月迄四拾式日分トシテ降ル、明治二十六癸巳年七月吉日書之、神主休左衛門、惣代徳永休太郎、内神主上平田善右衛門、「畠中藏右衛門、二十長六反佐市、二十長塙屋仲左衛門」とある。

菊十六花弁の賽銭箱は明治二十年生同年会奉納のもので「六反天之助、別府新助、大岩根新次郎、仮屋仁之助、小園猪之助、有村藏次郎、塙屋休右衛門、東清、平田清太郎、森山新太郎、児玉新助、児玉金左衛門、西浜虎藏」とある。

小浜地区の「太鼓踊り」にしても、早鈴神社の各記念碑にしても、その愛郷心に感動させられる。

小田青木神社に昭和四年三月吉日の奉納、御神橋并参道階段改築碑がある。碑文に「役員西井上盛吉、本村栄吉、高尾野半十、居細工才藏、大迫記吉、西井上盛吉、福重半之助、石塚吉之助、金床次郎吉、昭和三年、高尾野半十、前平利兵衛、白拍子熊右衛

門、岩切熊市、山下畠吉、前平金左衛門、中原栄吉、福重半之助、上和田栄次郎、大人正次郎」とある。

昭和五十五年二月十七日建之の記念碑文は「総代田辺国治、寺園末治、河野道廣、金床浅雄、村山静雄、下脇敏雄、堂脇武雄、袴田栄蔵、末永和徳、町議末永栄」とある。前記の大家は岩川の弥五郎どん祭りに関係がある。

昭和和三年四月吉日の奉納記念碑文は「当年四十二歳厄払、高尾野半十、前平利兵衛、白拍子熊右衛門、岩切熊市、山下畠吉、前平金左衛門、中原藤吉、福重半之助、上和田栄次郎、大人三次郎、石工府中福山三四郎、昭和六年四月十三日の擴張記念碑文には「神官蒲地源之丞、議員西井上盛吉、高尾野半十、大迫記吉、旧総代本村栄吉、居細工才藏、新総代大迫平次郎、東井上藤吉、付属員前平半之助」とある。

厄払い記念碑に昭和六年四月十三日「四十一歳、大迫平次郎、前平半之助、東井上藤吉」がある。

昭和四年三月吉日、厄払、奉納御神橋并参道階段改築記念碑に「四十二歳、新中政吉、山下次郎吉、石神半之丞、竹崎長太郎、地藏原栄蔵、石神八蔵」とある。

昭和六年四月吉日の奉納、神前参道の記念碑に「四十二歳、新中袈裟次郎、石塚吉之助、徳永七之丞」とある。

昭和六年四月十三日、厄払記念碑に「奉納、四十一歳大迫平次郎、四十一歳前平半之丞、三十七歳東井上藤吉」とある。

野久美田の中山神社には、「寛文八年（一六六八）戊申天八月八日、仲山大明神宮、奉寄進参道」の碑、同じく「奉寄進燈籠壱基、享保十六年（一七三一）辛亥十二月十九日、願主木藤李兵衛武董」とある。

鳥居付近には「奉寄進、文化元年（一八〇四）甲子九月吉日、四郎右衛門」の碑、同じく「明治三十六年十月十日、竹内安千代、奉納」の碑がある。

昭和二年五月十四日建設の中山神社社殿改築記念碑文に「村會議員末永武蔵、総代永里庄太郎、野辺泰治、永里三右衛門、神田長右衛門、碑文筆者前田鶴吉、請負神田栄蔵、大工服部嘉熊、大工池田傳吉、青年役員野邊辰雄、西山時義、赤池盛次郎、南元源行、松元盛之、森田武雄、丸山秀夫、中村司、塘重雄、赤池重盛、泊重義、社掌斜木休右衛門、永里金太郎、氏子一同、建設委員、勝目次右衛門、松元長右衛門、山口吉次郎、米永熊助、藏元健、田中庄次郎、田中金助、坂元松之丞、丸山喜次兵衛、林甚吉、津曲三之助」とある。

賽銭箱に「奉納、昭和五年四月十六日、松崎三左衛門」とある。また篇額の絵馬があり図柄は武者と駒だが摩滅している。「奉寄

進、田中門、坂元門、福永門、精木門、堂蘭門、松崎門、未永門、中村門、藤浪、服部、是枝、松崎門、富永門、山元門、前村門、宮下門、南園門、藏元門、松永門、三輪、西、大岩根、野久美田村、中老二才中、松坂門之をかく、文久三年（一八六三）亥三月二日」と書いてあるが、全く磨滅している門が二〇は確認できる。

前田鶴吉宅前に明治六年十一月吉日の「保食神」の石碑があり、富永吉藏が永年維持保存されている「弘法大師ゆかりの井戸」があり、豊かな水量を誇っていたが、この温い甘露な水も近年自噴量が低下しつつあり、関係者を困惑させている。

隼人工業高校裏（現在始良郡医師会館）に煙草乾燥収納所が設置されていた。

建築記念碑に「収納所設置者、隼人町煙草耕作組合組合長星原休之吉、日当山煙草耕作組合組合長竹下武兵衛、隼人町煙草耕作組合副組合長川添新藏、請負者大堀政雄、渡辺綱、田辺熊太郎、工事委員西原重吉、功労者芳名、専売局国分出張所長川田国知、代議士東郷実、前町長蘭田新太郎、前組合長原口栄樹、元組合長福重半之助、町議会議員代表町長平山喜一、煙草代表、森豊権之助、木藤一二、古川清藏、松元仁之助、徳留助八、神田栄藏、豊満周右衛門、書記中馬一郎、新地兼徳、技手満田甚吉、岩屋肇、煙草代表塙満吉之助、西原重吉、田辺熊太郎、渡辺組」とあり、碑文は「抑モ吾町ハ銘業国分煙草ノ搖籃ノ地トシテ知ラレ過去幾百年ノ間、時ニ盛衰消長ヲ免レズト雖地方特產品トシテ其ノ名ヲ恣ニシ農家ノ経済金融ニ寄与スル所大ナリ、殊ニ煙草専売法実施以来葉煙草生産試験所ヲ設ケ、深潤ナル学理ト実際ヲ究理シ之レカ指導奨励ノ結果急速ノ進歩ヲ遂ゲタリ、試ニ吾町ノ業績ヲ徴スルニ大正四年度ハ耕作者千七十四耕地五十七町歩量目壹万八千貫賠償金三万五千円ニ過ギサリシカ爾來逐年増加シ、昭和四年度ニハ耕作人員千二百耕作百町歩量目四万六千貫、賠償金実ニ武拾五万円テフ異常ノ躍進ヲ示セリ、然ルニ町生産葉煙草ハ専売局国分出張所ニ於テ収納セリ、此レガ為メ耕作者ノ不利不便尠カラス殊ニ収納期日ノ遅延ハ生産者ノ困苦ハ更ナリ延テ農村金融経済ヲ阻害スル処大ナルモノアリ、識者夙ニ之レヲ遺憾トス而シテ之等ノ障害ヲ除キ益々斯業ノ發達ヲ期スルニハ収納所ヲ吾町ニ設置スルニアリトシ、大正十四年隣村日当山ト提携シ之カ設置方ヲ其筋ニ請願セリ、爾來十有余年ノ間県当局地方選出代議士ノ援助ノ下ニ主務省ニ陳情シ猛運動ヲ試ミル幾十回ナルヲ知ラス、漸ク当局ノ認メル所トナリ昭和八年七月設置許可ノ指令ニ接セリ、茲ニ多年ノ懸案宿望成ル、耕作者関係諸団体ノ歓喜ヤ思フベシ、町煙草耕作組合ハ壹万八千余円ノ巨費ヲ投ジ客年九月八日起工、同年十一月九日竣工ス茲ニ建築記念碑ヲ建テ後裔ニ云爾、蘭田新太郎撰」とある。

尚隣接して設置されていた始良郡立屠畜場にも「家畜頌徳招魂碑」が建っていた。「大正四年十一月建設、明治四十一年十一月十

一日、大正四年十一月三十日、牛五千五百二十六頭、馬千六百三十一頭、豚三千四百九頭、犢五十四頭、總計壹万六百三十頭」あつた。

陸軍特別大演習（昭和十年十一月十日）隼人野外統監所設営（獅子之丘）時から移転問題となつてゐた。「聖蹟獅子之尾（二瀬戸石）」の記念碑も隼人工業高校裏から体育館前に移されているが、前田鶴吉の努力によつて一箇所に集約されている。

「県営宮内原地区灌漑排水事業竣工記念碑、鹿児島県知事金丸三郎書」がある。碑文に「靈峰霧島二源ヲ發スル天降川カラ延々拾五杆ニ及ブ宮内原用水路ハ享保元年開鑿以來二百六拾余年ノ歲月ヲ経、為メニ老朽化甚シク之ガ維持管理ニ支障ヲ來シタ。偶々宮内原ハ島津両改良区ノ合併ヲ期シ、県営灌漑排水事業トシテ、昭和四十一年四月着工、爾來受益者ハモトヨリ県當局ノ指導ニ依リ、昭和四十八年三月完工シタ。農業基盤ノ安定向上ヲハカリ業績ヲ永遠ニ光輝アラシムベク記念碑ヲ建立シ併セテ隼人町農業振興ノ碑トスル。工事概要、取水河川、天降川、工事期間、自昭和四十一年度、至昭和四十七年度、總工事費三億五千万円、受益面積五五九、九ha、幹線用水路、一三、八〇〇メートル、放水路延長、二、九二〇メートル、反別事業費五七、五一〇円、用地買収、六七二ha、頭首工、一箇所、事務所、六六m、昭和四十八年十月十七日、隼人町長初瀬哲夫撰、理事長前田鶴吉書、隼人町宮内原土地改良区役員、理事長前田鶴吉、副理事長松崎初、理事、平原盛二、河原進、迫田武藏、秋丸勇隆、森豊嘉次郎、内田正夫、堀之内国盛、米満基、島廻猛夫、米満藤吉、徳田平蔵、坂口鹿兵衛衛、中村虎吉、野間盛熊、川畠秋則、松山千代吉、森忠三、徳田政市、森重吉、末永栄、大迫正光、赤池愛次郎、監事、児玉景幸、米田直暉、末重太吉、事務局長海江田重文、書記新門武男、工事請負業者、佐々木組佐々木国治、大英組岩沢英美、岩沢組岩沢光男、石工矢野親男」とある。

昭和二十六年五月二十五日竣工の宮内原用水路改修記念碑文は「記念設立委員長末永武藏、鹿児島県知事重成格、加治木耕地出張所長西村正男、全技手三坂平、鹿児島県農地部長前田瑞穂、県耕地課長小城直哉、全補佐大井兼次、宮内原新田普通水利組合、隼人町長福重半之助、右代理者助役野辺辰雄、収入役新地兼徳、顧問、日当山村長山口慶二、国分町長吉満三次郎、石工東国分森園盛吉、宮内原新田ハ汾陽翁開鑿以來二百四十余年蒙利反別四百拾余町歩ニ増加シ灌水ニ不足セルヲ以テ本組合ハ昭和廿一年度ヨリ改修工事トシテ國庫ノ補助ヲ得隧道暗渠堤防等二大改修ヲ加ヘ昭和廿六年度竣工ス。為ニ灌漑ニ余祐ヲ生ズルニ至ル。福重半之助撰、前田鶴吉書。水利議員池田三蔵、西井上盛吉、崎拾次郎、野間盛熊、前田鶴吉、有村架裟助、秋窪美、荒瀬泰哉、秋丸勇隆、新中袈裟次郎、平原金助、森市郎左衛門、奎田十吉、森豊嘉次郎、森重義、常設委員中村勇蔵、隈元平治、書記堂脇秀雄、星原英規、海江田重文、工事請負者宝徳組、西松組、農村建設、九星建設、自昭和二十一年度、至昭和二十五年度、總工事費一金式千八百式拾三万九千四

百円也」とある。

鹿児島神宮奉納篇額の一に「馬渡昌興」の額がある。拔文に曰く「馬渡昌興先生奉納之額二而所自筆也。距今而有余年莊飾剝落恐失、旧容之軀面矣。於茲吾輩合皆以修飾之聊副宮殿之壯觀、將亦使先生之精神永伝于社頭也。」実明治十八年秋八月也。主唱人鎌田一郎、曾木恩介、曾木彦五郎、新納豊一、新納平十郎、曾木俊彦、川上武彦、上村泉三、桑幡孫七、犬童英介、木佐木雲囀、四元雄輔、牧瀬白三、竹下敬輔、賛成者、中川敬止、城川市二、川畠武右衛門、松永五右衛門、壹岐嘉吉郎、有馬七左衛門、重久利左衛門、中摩平介、小濱有照、佐藤平右衛門、松田吉左衛門、吉井武兵衛、川畠助右衛門となつてゐる。

明治三十八年五月、奉納篇額（絵馬）に「朝日と鶴二羽」の図柄が屋久杉の一枚板に画かれている。「芋国小松文雄拜画、奉納鹿児島県岩元正亮（旧名伊太郎）、妻盛子、官幣大社鹿児島神宮・黄銅・慶応二年、岩元伊太郎君・外八名之奉納者也、而・其祝・意併表敬神之・旧名處明・」とあり、大部分剥落している。

同じく明治三十八年四月の献燈が四所宮（大雀命（仁德天皇）、大日売命（全皇妃）、荒田郎女（全妹神）、根鳥命（全弟神）前にある。

「浜之市町、森嘉兵衛、森安之助、森治兵衛、中村善兵衛、林岩吉、山内広治、森重太郎、中村善治、石工、鹿児島市、篠原亀太郎」の石塔が社殿に向つて右側、左側の献燈は「明治十九年十一月、浜之市町、山内幸右衛門、森仁右衛門、森喜平次、森喜右衛門、中村八百助、中村弥兵衛、石工人、間世田万太郎」とある。

鹿児島神宮入口付近にある石華表は明治四十年八月吉日のものである。神宮に向つて左の石柱に、「奉納立、大隅国加治木町、小杉恒右衛門、此石材姶良郡加治木村曰木山字二瀬戸之產也」とある。右の石柱に「工事監督、山内平蔵、石工頭、中島正次郎、運搬及人夫頭、上園畠次郎、石工、馬場平次郎、小松文雄以隸法謹書」、笠木に当る処に「敵艦降伏」とあつた。終戦後セメントを塗りつけて消えている。東郷平八郎の書であつた。その原本を書いた桑幡公幸（号南洲）の書がその俊彫刻され、東郷元帥の書は小杉恒右衛門が所蔵されたと聞く。小松文雄・桑幡公幸は当代随一の書家であつたし、日清・日露戦役の国威発揚期の所産として興味深い。

中津川（犬飼滝）に和氣神社があり、その境内に大正十二年五月建てられた「照国公手植松之記」の記念碑がある。

「大勲位公爵松方正義題額、隅州姶良郡牧園村大字中津川に一大瀑布あり、犬飼滝と云う、矗立數十尺數丈に分れて落下し、壯觀

を極む。時惟嘉永六年冬大守照国公対内東日沿岸の防備せしめんが為に、隅日二洲の諸郷を巡見せれ、臘月（陰曆十二月ノコト）十八日駕を此の瀑辺に駐め景勝を賞し、手づから松樹十株を植えさせ給へり。其の後、公八田知紀に命じて和氣公清磨謫居の遺跡を探査せしめられしに、会其の遺跡を瀑布の辺に発見して之を復命せしと云う。爾来星移り物換り、明治三十四年秋子爵税所篤翁忠烈和氣公之遺跡を顯する一碑を手植松の傍に建て以て照国公の遺昔を紹述せられたり。今やその樹亭く拱すべく以て公が当年の深意偲ばしむるに足るものあり。嗚呼忠臣の芳躅賢侯の美挙、其の流風の存する此の地を過ぎ此の松を撫するもの誰か甘藷の感無からんや。茲に本会は大方人々の贊助を得此石を建て以て忠賢の快事を不朽に表す。薩藩郷土史研究会、梅園良成敬書」とある。

大正十年三月三日、隼人塚と大隅国分寺が内務省より史跡名勝天然記念物として指定されていること等考えると意味深長である。他に「忠烈和氣公之遺跡、税所篤翁碑、明治三十四年」、「義人稻積翁碑 大迫尚敏書 大正十四年」、「義人稻積翁宅址、大久保利武書、大正十四年」、「亀園淵河伯祭場址、三原辰次書、大正十四年」、「仮寓高尾山寺址、島津長丸書、大正十四年」等の石碑があり、慶應二年（一八六六）坂本龍馬夫妻も訪れている。

鹿児島神宮斎田一隅に建つ田の神石像がある。石像背面に「天明元辛丑（一七八一）天九月月吉日、正八幡宮田ノ神。沢正納右衛門」とある。沢家は四社家の一つで、田所職の家系である。高さ八十三センチのユーモラスな踊り姿である。くくり袴を穿き、頭にシキを被つている。右手に飯杓子、左手に飯椀を持つ動的姿態である。顔は現存田の神舞（隼人職小倉軍藏）で使用する翁面に似せてある。

内の氏神、蛭兒神社は大隅二之宮とされているが、始源は一番古い土地開発神と見られるが、天孫族系に転化付会されたようである。

境内に昭和五年一月十一日の石碑がある。碑文に「蛭兒神社、靈蹟奈毛木の社に鎮ります吾等の産土大神は蛭兒の尊にして、畏くも伊邪那伎尊、伊邪那美尊の御子に当らせ給えり。古来鹿児島神宮を大隅一の宮と称し、蛭兒神社を二の宮と称して、祖先人の崇敬措かざる所なり。古文の蛭兒の神御年三歳に成り給へど脚立給はざれば父母の神天磐樟船に乗せて放ち給ひしが此の地に漂着し不思議や其の御船は芽を萌き枝を生じて巨木となり二百年前立枯れしと、今に洞となりて残れり。之を神木と称す、古今の名歌頗る多し。旧社殿は此の神木の北方五間許りに在り。寛延三年新田川水患を憂ひて今之地に遷祀せりと。爾来神威嚴として賽者常に絶えず。明治十四年社殿改造後既に五十年を経て殿堂腐朽し山雨到る毎に雨漏甚しく吾人洵に恐懼に堪へず。昭和五年四月惣代

委員と評を重ね広く氏子町民に義金を募集し、同年七月起工、同十月拝殿の改築、宝殿の改修、境域の修理完く成る。壯麗森嚴にして坐口に神威の崇高を偲ばしむ。仍て碑を建て録して後昆に伝ふ云爾。隼人町長蘭田新太郎撰、三島亨謹書」とある。

石体神社境内に「紀元二千六百年聖蹟顯彰、淨財寄附者芳名錄記念碑」があり、「隼人町聖蹟顯彰会々長蘭田新太郎、委員川野政太郎、久保新蔵、久徳新蔵、新村休五郎、塙屋勇雄、川島経助、林愛次郎、佐藤武助、大西重俊、渡邊綱治、淨財篤志者、計九拾壱人、金七隧九千百四拾円、：」とある。

同じく「神代聖蹟高千穂宮址」の顯彰碑がある。「高千穂宮ハ彦火火出見尊久シク坐シマセシ宮居ニシテ尊ノ御孫神武天皇又此ノ宮ニ在リ皇兄五瀬命ト御東遷ノコトヲ謀リ給ヘリト官幣大社鹿児島神宮神域石軸神社及附近ノ地ハ即チ其ノ宮址タリ紀元二千六百年肇國ノ悠遠ヲ偲ヒ光輝アル此ノ聖蹟ヲ敬仰シ茲ニ碑ヲ建テ整ヘ以テ永ヘニ傳フルモノナリ」とある。

辻の角にある「大隅一之宮、鹿児島神宮社号標は昭和四十一年三月吉日建之、奉獻、秋窪勇、有村満夫、大坪廣治、川添新蔵、最勝寺辰郎、住安国雄、初瀬哲夫、原田盛二、中村繁、藤田貞雄、前平福次、川崎志、桑幡道信、鮫島辰彌、蘭田新太郎、野元たけ、原田千代吉、林昌治、前田国雄、吉永光廣、南溟謹書」とある。(鹿大教授川上南溟)

石体宮と蛭兒神社の中間に旧正興寺址の墓地があり、鹿児島神宮、明治の初代宮司、「正七位三雲四月若磨之墓、天保九年四月二十五日生、明治二十五年八月十三日卒、享年五十五」の墓碑と「正七位三雲四月若丸妻国之墓、天保九年五月一日生、明治二十八年十月十二日卒、享年五十有九」の夫婦の墓標が建つてある。

天降川大津川原に水神碑が建つてある。

復舊工事記念

昭和二年八月十日、六十年以来ノ大水、村内浸壊、堤防及八所村計上工費二千五百円、加縣補助千五一円、区民寄附四千五百八十六円成復舊工事、其属本大字五所補助額千九百九十七円、翌三年二月二十八日起工。令年六月二十八日竣工、大字総代、海江田豊、富森次郎吉、永重喜次郎、木房仲左衛門、温田太郎、工事委員、平隈守雄、竜波見一雄、森豊銀蔵、木房貞吉

角井ヶ城は茨山(射場山)とも呼ばれ、日當山地頭館の跡で、旧日當山小学校が設置され、校歌にも「茨山」とある。現在は隼人町福祉センター、町老人給食センター等が設置されている。初期の地頭館は東林寺にあつたといわれる。

角井城は前面をすかし掘りされて大きく山腹を抉られている。山腹に今霧島神社がある。以前は湯田の荒瀬城(荒瀬昭治宅付近)

にあつた。

明治三十五年六月建設の今霧島神社改築記念碑の碑文に「末原次郎兵衛、永田利太郎、平原林左衛門、浜崎林左衛門、最勝寺甚四郎、平原助市、市来清兵衛門、吉留喜右衛門、西与助、藏元八左衛門、今吉八太郎、吉留勘四郎、田中直次郎、吉留暎助、田中万右衛門、山野孫右衛門、改築委員古川正市、稻田英之進、竹下嘉納次、園田幸右衛門、隈元助之進、社司矢神実熊、横山権兵衛、大工森吉次郎、石工大保利助、寄附人名荒瀬八之助、古川正市、稻留栄之進、東万右衛門、東七太郎、竹下嘉納次、荒瀬助市、古川藤左衛門、川原暎五郎、隈元助之進、永田次兵衛、隈元七次郎、山下源助、鶴丸元右衛門、福沢善左衛門、藏元有右衛門、平原太郎右衛門、中村喜太郎、有川吉左衛門、最勝寺甚太郎、迫田吉太郎、園田宇右衛門、吉村休次郎、最勝寺徳之助、藏元四郎助、湯田十太、平原林右衛門、有川喜次郎、立元熊太郎、今吉八之助、平原暎太郎」とある。

明治四十年二月十二日、水神碑一基。「大正十一年十一月十日、献燈、厄年記念、荒瀬金之助、東市太郎、平原林助、古川正志」の石燈籠、大正十一年十一月二十一日の改築記念碑に「改築総代、隈元七次郎、古川太市右衛門、荒瀬助八、東萬四郎、社掌矢神実熊、愛甲昌二」とある。

大正十一年十一月十日、厄年明記念碑に、「六十二歳、浜崎林左衛門、隈元七次郎、古河正市、藏元八左衛門」とあり、社殿は南面している。

東郷山下公民館と同じ境域に飯富神社がある。「受持神社、明治二十四年六月七日」、「御水天、延享五（一七四八）戊辰稔六月二十八日」、「宇氣母智大神、明治九丙子年（一八七六）」、「大正四年十一月八日建設、献燈壇基」等の小石碑と秋葉大明神の小祠とがある。

同じく東郷高畠に愛宕神社がある。高畠・西光寺・東林寺の士族集団の祭神であった。現在極めて衰退して昔日の面影はない。

「愛宕大権現守、正徳二年（一七二二）壬辰十一月」の石碑が一基ある。

東郷高畠にある耕地整理記念碑は、「昨秋政府カ農山漁村不況対策トシテ、時局匡救土木事業ヲ起スニ当リ、當関係地主八拾弐名相計リ組合ヲ組織シ、工事関係者、池田勇吉、吉村良俊、西田金右衛門、池田吉左衛門、濱田与左衛門、濱崎壯吉、川路嘉左衛門、田原熊右衛門、分田熊吉、元池正藏、起工昭和八年一月十日、竣工昭和八年六月五日。建碑昭和九年一月十日」とある。

朝日（旧浅井村）の日秀神社（旧三光院）参道入口に石燈籠一基がある。「万治三（一六六〇）庚子稔島津兵庫頭源忠朗、奉寄進

石燈式基」とある。

社頭の石燈籠は「安永二（一七七三）癸巳年三月吉日、永代常夜燈、願主鶴木善助、

経机の背面に「三光院十四裔堯運、国分麓新橋甚六、右同市成喜藤次、本町海江田休左衛門、同幸助、同小八郎、同宅助、同嘉右衛門、鶴木作兵衛、同善助、同半左衛門、林四郎兵衛、同与兵衛、同唯右衛門、同伴兵衛、同九郎左衛門、同賀左衛門、唐仁町同善兵衛、本町同五郎右衛門、森口傳右衛門、津曲清兵衛、伊作之住人休次郎、明和五歳次（一七六八）戊子夷則吉辰」の署名がある。日秀上人以来伝統的に中國婦化人を軸とした商家の人々が奉加していることが分かる。

野神城の中心は「ほめずが池」の池の大王神社と見られる。朝日は全部が中世の城域で、居館跡も中央部（蜜柑畠）に残存する。荒瀬城南側の天降川畔に荒瀬昭治宅がある。現在国道223号線より切通し（大正五年開鑿、昭和四十七年十月拡幅）で結ばれている。それ以前は山越えをして国道に出ていた。荒瀬宅入口付近に「イチイ」の古木があり、目通りで四メートル・高さ二十五メートル・約八〇〇年の古木である。樹下にある卵塔墓は苔むしていて、刻名も読みとれない。

福山町福山浦町の宮浦神社の「イチヨウ」（約千年）、鹿児島神宮の「クスノキ」（約千年）、同じく神宮の「ナギ」（約七〇〇年）などの古木もある。

中福良小学校入口付近に日枝神社（祭神大山咋命）がある。境内に天保四歳癸五月吉日の石造の小祠がある。別に昭和四年二月十六日許可、昇格記念碑があり、「村長・西田金左衛門、神職・矢神実熊、隈元七太郎、校長・塙川満英、氏子惣代・松下長左衛門、横井善之助、前田仁之助、井手上金次郎、堂下金助、川崎伊兵衛」とある。近くの肥薩線迫間踏切には「日当山村消防団長・迫田辰二殉職之碑（昭和二十七年三月三十日散華）」が建っている。

旧西光寺坂（せくし坂）に「道路開鑿記念碑」が壇基ある。「工事委員浜田満雄、池田好幸、出水正助、池田彦熊、池田徹志、原口三太郎、浜田真二、西清、川添市蔵、米徳次郎、米元喜兵衛、米徳勇吉、米元喜蔵、岡留清一郎、福丸暎助、福丸豊次、前田甚次郎、松元武熊、有園市太郎、満留畠市、平原源雄、平原林蔵、最勝寺虎熊、林仁左衛門、宮下勘助、石工平原林右衛門、浜崎市郎、起工昭和二年一月十五日、竣工昭和三年四月十日、工事費現金四五六五円、内村費補助二〇〇〇円、一般寄附金一〇〇〇円、兩部落負担金一五六五円、労役延日数一一六五日、此換算金九三二四円（労賃一日一人八円相当になる）、合計金一三八八九円、西襲山村長松元清彦、道路監督員井手上金次郎、村會議員池田好幸、荒瀬惺夫、児玉喜春、祁答院健之助、上野七次郎、竹下秀熊、下村

藤男、岡留清一郎、堂下矢一郎、徳丸嘉次郎、前田甚四郎、山下幸平次、隈元昌七郎、爰畠長右衛門、竹下仲二、横井源之丞、横山庄衛門、有川叶、有村市之助、有島助左衛門、荒瀬助八、児玉正一郎、古川虎之助、前田仁之助、元池親三、広元庄右衛門、下神辰之助、下村市太郎、南助右衛門、福元暎太郎」とある。

碑文にある浜田満雄（明治二十九年三月二十六日生）（当時の工事委員）は健在（西光寺（涼田）一二〇九番地、八十九歳）である。西光寺旧入口は東郷上高畠より十三坊峠の道と日当山城下を迂回（肥薩線鉄橋下）し西光寺川左岸に沿つた道の両道であったと云う。十三坊跡は現在確認できる。

松永宇都公民館の一隅に頌徳碑がある。岩元助右衛門君、脇田新助君、瀬戸口傳四郎君、鶴ヶ野助市君、福留藤助君、雉牟田藤兵衛君、下牧暎次郎君、諸子ハ明治卅一年一月、宇都報効農事小組合発企者トシテ……。

自明治37年1月	至明治40年12月	吉元助右衛門	建設當時相談役
タ 41年1月	タ 42年12月	脇田 新助	花山 勇 熊
タ 43年1月	タ 44年12月	鶴ヶ野助市	吉元熊右衛門
タ 45年1月	大正2年12月	川越吉太郎	鶴ヶ野虎熊
大正3年1月	タ 4年12月	下脇田七太郎	吉満暎市
タ 5年1月	タ 6年12月	前田猪之暎	川越吉次郎
タ 7年1月	タ 8年12月	小山下傳右衛門	逆瀬川清助
タ 9年1月	タ 10年12月	雉牟田金藏	下脇田金助

各年次の農事小組合の会長・副会長が記録されている。別に「開田記念碑」もある。

園田
武安 大正4年9月20日、地主懇会

開田工事発企者、西園助市、小山下傳右衛門、前田猪之暎、花山喜右衛門、福留藤助とあり、工事主任福留藤助、会計係書記、小山下傳右衛門、前田猪之暎、有村仁四郎、石工監督、吉元助右衛門、鶴ヶ野助市、岩元七左衛門、人夫監督、西園助市、花山喜右衛門。

宇都橋完工記念碑は昭和三十六年四月二十三日竣工のものである。碑文は「町長、野邊辰雄、助役、森山重義、収入役、小瀬満、庶務課長、上平田貢、財政課長、秋窪鉄哉、建設課長、平野肇、町議会議長、瀬戸口清志、副議長、濱崎正名、建設委員長、辰元盛夫、地区議員、神園長市、発起人宇都公民館長、平田浩、産業部長、脇田親雄、工事請負者、佐々木国治」とある。

国立霧島病院入口の松永橋袂に、石碑が2基ある。松永河川改修耕地整理記念碑、東郷実書である。碑文は「鹿児島県知事市村慶三、耕地課長藤本達次郎、松永耕地主任農林技師新村助吉、加治木出張所長田島亭助、加治木出張所主事補田中隆三、技手池田重雄、書記小池秀雄、元所長瀬戸山東、総予算額十萬六千九百八十七円也、工事費九万七千八百円也、事務所費九千百八十七円也、総地積五十八町六反歩、開田整理地積四十八町六反歩、古田整理地積十町歩、堤塘全長但シ片側千八百三十三間、東襲山村長岩城盛藏、組合長総監督西園助市、副監督塩満小吉、会計副組合長監督脇田彦次郎、評議員監督富元三四郎、岩城直志、松元長吉、逆瀬川清政、下牧嘉右衛門、津田和親志、岩元喜左衛門、会議員川畠熊次郎、下脇田七太郎、海江田奎之丞、西園金次郎、下牧金次郎、始田仁八、田原伊右衛門、大正十年十月八日、組合長西園助市、補佐塩満小吉」である。

他の一基は昭和十年四月二十六日、松永橋架設ノ件の石碑である。碑文は「昭和九年一月十四日村会ニ於テ議決、匡救土木費ヲ以テ架橋、村長岩城盛藏、県会議員中馬猪之吉、土木主任技師池田多喜雄、土木助手大迫喜衛、請負者赤崎権助、永徳末吉、村員、下脇田七太郎、有村仁四郎、西園助市、花山善太郎、川越吉之助、真所武熊、下牧金次郎、雉牟田金藏、有村常次郎、有村熊右衛門、吉元熊右衛門、岩元喜右衛門、吉元畠右衛門、矢神森次、前田猪之畠、福留重良、石工福山三四郎」である。

松永村最後の庄屋は川越甚右衛門、島田喜助、山下仲太郎である。

松永山林高寺、富明山脇田庵（禪宗・本尊薬師如来）が現在「薬師の水」と呼ばれる地域（下小鹿野・山住武男宅裏山）で、宇都の磨崖仏（菅原天神）と共に仏の里である。

曾於郡春山野御馬追郷を見ると、高崎・日当山・敷根・高原・財部・百引・清水・福山・栗野・牛根・曾於郡の十一か町であった。

諸郷の御立所は御塚原・浜田原・須河原・小瀬戸・法ヶ崎・猪ノ窪・上外戸前^{ナカヨシ}の七地点で、東西南北に外戸四箇所を設置し、馬糧として雑穀・甘藷等を一斗宛、三月・四月頃に地上に撒布（燕麦は明治初期より）給与する。

毎年馬追いの時は、霧島山法師に御祈禱、ついで藩祈願所吉祥院（剣之宇都）、ついで止上神社々司、ついで山伏馬場宥性院が

祈禱を相勤める。

馬追い定書によると、「勢子は馬追いに出精し、喧嘩・口論・無作法な振舞い。御棧敷前で猥に騒ぐ事、馬追い奉行の下知に従う事、駒取人の下知に従う事、貝の合戻で未明に集結し、日の出と同時に引き立つ事、串目を立てる仕事は16歳から30歳迄の若者とする事」が指示されている。

牧司役 貴島嘉右エ門

駒見廻 貴島林右エ門

牧司役 中別府新助

駒見廻 高山稻右エ門

右牧司役二人、駒見廻二人、下牧二人。

牧司役一人、役料として畠一町五反歩宛被下置候也。

東外戸番人 吉村助右エ門

西外戸番人 鶴丸善左エ門

南外戸番人 安田全次郎

北外戸番人 坂元喜助

右四名に番料として畠六反五畝歩宛被下置候也。木戸番とも云い、人馬の出入り、馬の水飲み等を監視する。

「旧松永小校庭の一角に頌徳碑があり、「昭和26年11月3日、松永小学校PTA建之、寄贈者前田運之助君」とある。「昭和5年4月17日竣工、御大典記念、道路改修記念碑」と「松永小学校の跡」の記念碑も並んで建っている。

宮内小学校正門前、桑幡公秀宅一隅に、忠魂碑・戦役記念碑が各壹基建っている。

石燈籠壹対は宮内婦人会、明治三十九年八月十日建設。「会長温田藤太郎、新村休五郎、役員根井カヨ、永野カ子、末重ケサ、種子田シカ、三雲ハナ、秋丸ハル、平隈ヒメ、原口チカ、瀬ノ口セイ、中園スカ、堀ノ内タケ、平野ケサ、岩切テイ、永重セイ、桑幡ハヤ、三島ヨシ、本木ツ子、加藤ヤス、龍波見ノリ、秋丸セイ、正泉寺ナヲ、谷口モリ、丸山ナツ、仮屋ミネ、松山シカ、税所ツ子」である。

明治三十七八年戰役忠魂碑の碑文は「神古我天孫則建大日本帝国以忠孝義勇為基礎矣。爾來皇威顯赫國民勇義三千年間如二十七年日清交兵春秋帝國軍隊奮進突貫向無不克勝清國不能支翌年割地出償金乙和技者國六洲嗚呼是非皇祖皇宗瞑助共國民忠良所哉。今刻當村從軍者姓名印謝神明仕謝國民以後世紀念矣。皇上至仁不忍隣邦之危使臣數反理義交說而義不協乃動大兵問罪於露謂之明治三十七八年之役天威所尚妖氣披靡講和茲成諸軍以次凱旋賞典扶助已行而皇上特悼陣死者不措失命祭其靈于靖國神社鸞輅臨御親舉其典尚未以為足又命都督及太守官祭之縣祭之而我村之士辱列神壇者二十有五人也。敵維悼維頑利器不備地利莫不得我軍惟忠惟義奮伐是努忍寒耐暑摧銳陷堅衝怒濤蹈險阻転鬪戰死傷日積迅發益勵大小數十戰若夫人人功烈具照青汗矣。嗚呼哉。二十有五人從宇内未曾有之大戰竭臣子之大分而天恩優渥無所殘魂其可感泣也。不返情有不勝歎者茲兵事會作主闔村相謀樹碑弔忠魂以表我恩并永勵敵愾之氣云乃歌曰「魂兮來享此酒清香魂兮來遊水明山光魂兮來留吾欽吾望魂兮來安子鄉子堂明治三十九年五月秋江津隈宏謹撰小松文雄謹書明治三十九年六月建設西國分村」である。

明治三十七八年戰役從軍碑は「露蹕踞清滿洲之野將逞欲於隣邦我皇至仁欲救之於樽俎之間多方萬瑞盡言竭事竟不讚乃動史上未嘗有之大兵者非我皇之志出于義不得已矣。實是明治三十七八年之役也。露宇内大國也。兵團軍旅之器械金穀又称之況十年之久尽智竭財以經營滿洲之野到處要害造壘成砦遼池堀濠其高數仞其深數尋植劍戟張鐵網硬彈電擊銃丸雨射理不可近矣。世界人呼曰難攻不落然而我軍擊必破攻必取使彼不能立于滿洲之野使宇内萬國激賞感歎不能措者何乎人奉皇上至仁體皇上極義故一旅之忠一團之軍則一團之義一人斃則其氣十倍千百則千百程是以使彼不能立而宣揚國威於宇内哉。然而我村從軍者三百十人而坦榮凱旋者三百人皆是忘身報國忠義之士也。誠我村之榮也矣。嗚呼欲使我百世後裔仰望其忠義以同盡君國於是乎。樹堺碑記其由云爾。明治三十九年五月秋江津隈宏謹撰小松文雄謹書」である。